

狐憑を治す、古來祈禱等の精神療法により、彼れの偏執を打破して第二人格をして第一人格に復歸せしむ。されど若し其の祈禱に對する信念の薄き時は、彼れの心を服するの力なければ之れを治す能はざれど、かゝる疾患を生ずるものの常として、祈禱等を信ずるの念も亦篤ければ其の功を奏すること多し。かゝる手段にあらざして狐憑を治せし面白き逸話は載せて清水濱臣の『泊々筆話』にあり。

橘の枝直は、いと丈夫心たくまじき本性にて、些毫も女々しき事なかりし人なり。若かりし程、公の仰せごととして、町の司の下つかさに召し上げられて、住みぬべき居處賜へりしに、やがて其の構への中見あるくに、巽の角に稻荷の祠あり、枝直、思ふに、祠こゝにありて家造りせんに便あしく、所をかへばやと思へど、今までかく有り來りし事なれば、さてあきぬ。かくて日頃經るに、朝夕好み飼へる小鳥、

ともすれば、失すること幾度といふことなし。いといふかしきことに思ひたるに、或る朝、小鳥また失せたり。こめおける籠も碎けぬ。枝直、いよ／＼いぶかしてみ、庭の中、此處彼處見めぐり見ありくに、稻荷の祠のあたりに尾羽散り亂れたり。枝直怒りて、年久しく使ひならせる老奴を呼びて、とも／＼に祠を取り除けつゝ見れば、狐の住所と見えて穴あり。親狐は居り合はせずして、生れ出でて二日三日を経つるばかりの子狐三つ四つ居たり。枝直怒りて、憎き奴哉、小鳥の失せたるは此の親狐が仕業なりけり、此子狐ども疾く取り捨てよとて、彼の老奴をして此狐をみな近き川に流させ、穴を埋め、祠をこぼち焼かさすてさせけり。しかるに其の夜より彼の老奴、身内ぬるみほとりて物狂はしくなり、えも知れぬ事ども云ひたけびて、あな憎くの此の老奴や、わがいつくしむ子どもを流し殺して、我が棲む所をこぼちしこ

とよ、いかにせん／＼、今宵を過ぎ、取り殺してんと大聲にさげふ。枝直、聞きつけて、いよ／＼怒りたけびつゝ、彼の老奴に向ひていふやうは、狐よ、汝こそ理なけれ、此處の居處は公より枝直に下し給へる所なり、枝直はあるじなり、されば祠を置かんもおかざるも、枝直が心なり、其のあるじの好み飼ふ小鳥を奪ひ食むは盗人なり、やよ、ことわりなのくち狐よ、子狐を流し捨て祠をこぼたせしは枝直がさせしなり、老奴が心よりなし／＼にはあらず、うらめしと思はゞ枝直にこそ訴へなげかめ、老奴に何の怨み心を残さむ、放れよ、さらずばなほいみじきめをみすべしと責めければ、ことわりとや思ひけむ、やがて放れにけりとぞ。其のをしき本性此一事にておもひやるべし。

これ老奴の弱き心に狐害を受くべしとの觀念強烈となりて終に憑依の状態を生じ、枝直の強き心に制せられて此の觀念より脱却することを得た

るもの。吾等は常に憑依の談の心弱きもの迷深きものに現するを見る。

心、魔を生ず

恐るべきは外にあらずして、内にあり。「超日明三昧經」は教へていふ。

魔に四事あり。一に身魔、二に欲塵魔、三に死魔、四に天魔、たとへば兩木の相階なれば、則ち火を生じ、還つて其の木を焼くが如し。火は水より出でず、風より出でず、地より出でざるなり。四魔も亦復た此の如し。皆心より生じて、來るにあらざるなり。譬へば畫師の像を作るに手に随つて大小なるが如し。因縁合して、彩あり、板あり、筆ありといへども、畫師畫かざれば像を爲す能はず、四魔もかくの如し。心已に堅固にして起る所なければ則ち四魔なきなり。

魔、外より來らずして内より生ず。心の強きもの何ぞ魔の入るの餘地あら

ん。心、生ずれば種々の法生ず。心は迷悟の根本、恐ろしと思ふ一念は枯尾花をも幽霊と誤認し、落葉の窓を打つも怨霊の來るにあらざるやを疑ふ。心を以て迎ふれば、時計の鳴る音も或はチン／＼と聞え、或はチクチクと聞え、又コツ／＼と響き、天井に現はれし染汚も、人の顔と思へば顔の如くに見え、花の形と思へば花の形と見ゆ。これらは觀念によりて感覺に錯誤を來したるなれど、觀念の力は有中に無を現じて幻想を生ぜしむ。

大岡裁判

兇漢畔倉重四郎、曾て鈴ヶ森にて飛脚を殺して其の金を奪ひ、後、段右衛門と改名して舊惡を蔽へるを大岡越前守が充分に取り調べて罪狀明白となりしも、當人の頑強にして白狀せざるより、意を含めて一人の馬士を法廷に呼び出し、

「コレ品川宿の馬士、其の方は去年十七屋の飛脚を乗せ、鈴ヶ森に於て斬られし所、運よくも命助かりしが、其の時の盜賊は、此の段右衛門であらうがな。」

「へい御意にござります、確に見覺えござります。」

と馬士の答ふるに、心に覺えある重四郎は愕然として、

「さては其の時の馬士であつたか、さて／＼運の強き奴かな、後日の爲と止めまで刺したるに……」

止めまで刺したるもの、生くるの理なし。覺えある身の他人を見て此の錯覺を生ぜしのみ。僞らんとすれど僞り難きは人の心なり。名判官、能く此の機微を活用す。

幽霊の正體

幽霊の正體に就いて、司馬江漢は、其の著「春波樓筆記」に於て経験を語りていふ。

今より四十年前のことなり。(江漢は文政元年に没せし六郷の川上に毬子の渡りあり。則ちまりこ村なり。爰より二十町餘行きて郷地といふ處の染物屋の亭主は、かねて予に晝を學びて弟子なり。九月の末、我を伴ひて郷地に至る。翌日は雨降りて四五日も滯留す。其の時五六町かたはらに江戸より來たり居ける者として、手習の師匠あり。主人と二人連れして、彼の師匠の方へ行きける。夜に入りて歸る。其の路、鹽山洗足寺といふ寺あり。これは古へ神祖源君公、此處を御通行の時、老婆の衣類を洗濯しけるを御覽じ、其の寺號を御つけなされしとぞ、珍しき名の寺なり。其の日の暮方、此寺に葬禮ありしといふ。其の事も知らず、夜半頃、染屋主人と二人通りかゝりしに、其の寺の門前と覺

しき處に、白き衣服を著たる者の腰より下は地よりも離れ、あなたこそなたと動くものあり。世にいふ所の幽霊なり。我も若年にて此の様なもの今まで見たることなし。甚だ恐ろしく思ひけるが、其の近邊に酒屋あり、寢入りたるを戸を叩き起しければ、酒屋六尺棒を手に持ちイザござれ世に化物のあらんやと云ひて、先に立ちて行く。あとよりヲゾ／＼して就きて往き見れば、葬禮の時、紙にて造りたる幡の、木の枝に掛りたるなり。葬禮の時、幡の木に引き掛りたるを其の儘にして置きける。晝も此の寺の前に樹木茂り薄闇き所なり、殊更夜分ゆゑ甚だあやしく見えしものことわりなり。

世間に有り觸れたる笑話に過ぎざれど、徳川時代に於て初めて西洋畫に志し、筆致大に見るべきある江漢の追懷として頗る趣味あるを感ず。

幻覺と幽霊

幻覺は、實際上何等外界の事物なきを有る如くに知覺する心の變態にして、觀念の力によりて光線の網膜を刺戟すると同じき神經興奮を起して腦髓に傳はりて感覺現象を生ずるなりと説明せらるゝも、凡俗の徒は之れを外界より來る異様の現象とす。世に傳ふる幽霊談の多くは此の幻覺によつて説明せられざるにあらず。彼等の多くは其の觀念を強烈ならしむる或る事を爲したり。之れによつて一種の脅迫觀念を生じ、終に幻覺を生じて却て自ら苦む。心理學者いふ、幻覺も亦記憶に因するものにして心裡に何の記憶なきことの幻覺を生ずるなしと。四谷怪談の民谷伊右衛門はお岩を虐殺したり。其の當時怨めしげに彼れを睨みし相形は、伊右衛門の忘れんとして忘るゝ能はざる所。客氣旺盛にして他の觀念の之れに打ち克てる時は

しばらく其の力を弱うすべきも、中宵人なく靜かに其の當時を想ふ時、此の觀念は強烈となつて、こゝに幻覺を誘起し、髪振り亂して血に染みし姿の眼を去らざるに至りしにあらざるか。著名の怪談に就いて其の始終を見るに、概ね此の自己の心より描き出せる幻覺に外ならず。

幽霊談

一切の幽霊を唯だ幻覺の一事を以て論定せんとするは妄斷の甚だしきものなりと雖も、世間の幽霊談の多くが此の幻覺の中に包容せらるゝは争ふべからず。幽霊談には多く虐殺の伴ひ、又常該者の眼にのみ映じて傍らにある局外者の眼に映ぜざる等の事象に推して此の説明の最も多くの場合に適用し得べきを見る。心裏の幻影、發して外にあるが如くに感ず。淺草の某寺に後妻の連れ子たる娘の其の養父と通じて、實母を虐待し、痛心の極

病を發するや、之れを二階の物置部屋に入れ、食事さへも充分に與へず。殘忍にも不倫の親子の少しも之れを顧みず、死ねよかしの取扱ひしに、憤怨の極、彼れは終に縊死を遂げたり。此の虐待は心強き夫の心に印すること淡かりしも、心弱き娘の心には、さぞ我れを怨みつらんとの觀念、深く入りて、夜陰に至れば「あれお母さんが」といふ聲と共に、何者にか二階に引き上げらるゝかの如く駆け上りて、バタ／＼と落ち、自らは亡母の恐ろしき姿して我れを引き上げるの幻覺を生じ、夜毎に其の悲鳴を聞きしと附近の人より聞きしことあり。これらも自己の心中より此の亡靈を現出し、良心の呵責によつて此の苦患を招けるもの。丹波の某藩士に老母了月尼なるものを虐待して死に至らしめしあり。其の後、夜毎に了尼の姿の廁の邊に怨めしげに立てるを見ると、家婢の一人去り二人去り、下男も亦暇を取り、家族のみとなり、主人も氣味悪く、或る武術者を頼みて之れを卻けん

とせしも、其の功なかりしに、幸ひ江戸詰を命ぜられしかば、如何に怨靈とても、追ひ來ることはなかるべしと、五十三驛、何事もなく江戸に著せしに、其の夜、早や既に廁の邊に立ち居たりしといふを親しき人より聞けることあり。こも亦一人の幻覺に、其の噂を聞きしものも、心を以て之れを迎へて怪しきを見、終に武術者の觀念にも其の幻覺を生ずるの力となりしものか。心を以て之れを迎ふ、山河もとより隔てなし。其の江戸に來りしといふも、之れを以て説明し得られざるにあらず。唯だ幽靈談の多くは稗史小説によつて傳へられ、其の正確なりといふものも、自ら實驗せるは少くして他より語り傳へられたるものなるが故に、其の研究に於て確たる資料を提供するもの少さを憾みとす。

幽霊談は夢と連結すること多し。夢は精神の朦朧たる状態なり。此の時に於て朦朧たる幽霊に接す、又必ずしも關係する所なきにあらず。莊子は「夢は陽氣の精なり、心の喜怒する所、精氣之れに従ふ」と。夢書に「いふ、夢は像なり、魂魄身を離れ、神、來往するなり」と。古人は身心を別立し得べしと見、夢を以て心の身體より脱出して見聞するものとす。されど夢決して此の如きものにあらず、夢は睡眠中に現はるゝ一部の意識作用なり。吾等の身體には休養の時あるも、吾等の心は朝より暮に至り一刻も止ることなく、腦髓に於ては休養の期あることなし。此に於て漸次に疲勞を感じ、意識は開劣に流れ、先づ上眼瞼の壓覺、欠伸を促して筋覺の危雜を來さしめ、喉内の痒き感覺並に頭の後部に於ける垂下に始まり、呼吸緩く且つ深く、下顎は重くなり、最初に視覺休み、次に味覺に及ぼし、それより嗅覺、聽覺、觸覺の順序を経て、終に腦の血液を減少し、其の活動は

休止せられ、唯だ呼吸、血行、分泌等の反射的運動のみ存するに至る。此の時に當りては腦の活動休止せるが故に、意識の作用も亦休止せざるを得ず、之れを熟睡といふ。熟睡の状態には夢あることなけれど、此の熟睡より醒覺に近づき、又は醒覺より熟睡に入らんとする薄睡状態の時に當りては、腦の一部は未だ活動を休止せず(若くは活動を始め)、一部の意識現はれて此に夢境を現するものにして、もとく統一せられたる意識全部の活動にあらずして一部分の活動に外ならざるが故に其の状態も自ら醒覺時と異り、毫も時間空間に制限せらるゝことなく、古き記憶と新しき經驗とは無條件に結合せられ、或は幼時を今見る如くに現し、或は隔遠の地も、近く吾等の眼前に展開せられ、其の範圍は頗る廣く、其の變轉甚だ急にして亂雜突飛なる想像の外にあり。

夢と聯想

亂雜突飛なりと雖も、夢の觀念に連絡なきにはあらず。心理學者テイチ
 エナーいふ、「夢に現れ来る觀念も亦觀念聯合の法則に支配せらるるといへど
 も、夢中に於ては特殊の題目に注意を向くることなきが爲に其の範圍廣く
 して亂雜なるが如く感ぜらるゝのみ」と。夢中の意識は觀念聯合に一任して
 これを時間空間の範疇に入れて比較判断することなきが故に、何れの事實
 も悉く現在のものとなりて、過去なく未來なく、遠なく近なし、死せる人
 も夢中には、已に死せりとの比較なく、千里の遠さも、到り得べからずと
 の判断なく、甲より乙、乙より丙と移り行きて變轉定らず、時に他の觀念
 の悉く休止せるに、深く心に印したる強烈なる觀念のみ休止せずして、之
 れによりて夢境を現ずることなきにあらず。

結夢の因

結夢の原因は、これを身體の刺戟より生ずるものと、精神上より生ずる
 もとの二とするを得べし。食物不消化の時に苦夢を結び、病熱甚しき時
 に悪夢を生じ、室内に燭火を手にして入りしものありしが夢に入りて火事

思ひつゝぬればや人の見えつらん

夢と知りせばさめざらましを

といふ如き此の中に屬すべきか。心平かなれば夢も亦平かなり。夢を平か
 にするも亦吾等が修養の端ならずや。加藤千蔭の歌に、

思ふことなき世に經ればちもしろき

野山にあそぶ夢のみぞ見る

とあるは頗る欣羨に値す。

となり、太鼓の音を聴きつゝ、角力を夢み、夢に山より落ちしと見しは、我が足の高處より落ちたるに由りしの類は前者にして、心的状態によりて思ひ寝の夢となるは後者に屬す。佛典(大藏法數による)には「人、平昔、遊歴の處、或は見る所、聞く所あり、若くは善、若くは惡、念に繋つて捨てず、而して夢に現はるゝなり」と。夢は如何に豫想外を現はすとて、全然、醒覺時に於て經驗し、思念し、想像せざることを見ることなし。勿論、鳥の羽翼によつて飛ぶを目撃しつゝあるものが我が身に羽翼を生じて空中に飛ぶ如き聯想を生ずることなきにあらざるも、こは唯だ醒覺時の經驗の變形したるにして、全然心象に印せざることにあらず。近頃埃太利ウィーン大學の教授フロイド氏は、夢を分析研究する時は、多くは醒覺時に於て抑壓せられたる觀念の符號的に發表せられたるものに過ぎずといへり。醒覺と夢裡と終に没交渉にあらず。

盲者の夢

夢は經驗と没交渉なる能はずとせば、盲者果して夢なきか、彼には視覺の經驗なし、もとより夢の見るべきあらず。「醍醐隨筆」にいふ所頗る當を得たり。

我嘗て盲者に問ふ、夢見ることありや。盲者曰く、夢にも唯だ人の言語音聲のみを聞くも、思つて形色を見ることなしといふ。これ既に盲者なるが故に形色の思慮なき故なり。又聾者夢みるやと問へば、夢は唯だ人の形色模様のみを見て、音聲を聞くことなしといふ。これ既に聾者たる故に音聲の思慮なきなり。目、死ぬれば形色の夢なく、耳、死ぬれば音聲の夢なし。鼻、死ぬれば香臭の夢なく、口、死ぬれば飲食言語の夢なし。一身死ぬれば百夢千夢皆なしと思ふべし。

六 夢

支那に於ては周禮に六夢を擧ぐ、試にこれを示さんか、一に正夢、内心動する所なくして自ら夢に形はるゝなり。二に噩夢、内心驚愕する所あるによりて夢に形はるゝなり。三に思夢、内心思惟する所あるによりて夢に形はるゝなり。四に寤夢、晝見る所によりて夜則ち夢に形はるゝなり。五に喜夢、内心歡喜する所あるによりて夢に形はるゝなり。六に懼夢、内心怖懼する所あるによりて夢に形はるゝなりと。夢は外より入るにあらず、内より出づるなり。夢の研究、尙ほ未決の地多し。

夢の怪

ヘボンの心理學は夢の怪を傳へていふ。英國のコルンワルに住せるウイ

リヤムなるもの一夜に三回まで内閣尙書が廊下にて殺されしを夢み、驚いて人にも語りつゝありしに、不思議なる哉、其の日の日没後に尙書ベルンセワル氏は其の夢の如くに暗殺せられたりといひ、又夢に郊外の墓所に遊び、フト新らしき墓誌銘に氣づきて之れを讀みしに、そは其の夕會合せし友人の墓なるに驚きて熟視すれば、其の死没の月日まで明記しありしに、其の後數日を経て其の友人死去の報に接し、其の月日も亦夢中のものと異らざりしとの實例を示す。『新著聞集』には品川泊船寺の僧の延寶七年十一月二十四日の夜、夢に一人の高僧現はれ、次の如き詩を示し、

六十四年混三世塵。 夢中不覺養殘身。
不來不去是何物。 二月花開南谷春。

且つ汝は來春二月二十四日に死すべしといひしに、果して其の言の如く六十四歳を一期として其の日に示寂せし談あり。單に偶合の事實とのみ見る

べからざるものなきにあらず、「新著聞集」の傳ふる所は、我れは二月廿四日に死すべしとの豫期意向の其の人をして終に夢の如くならしめたりといひ得んも、ヘボンの心理學にいふ所は、事、他人に關せるが故に自己が心を以て迎へたるなりと云ふ能はず。夢の研究は尙ほ多くの疑團を吾等の前に遺す。

睡遊

身は一室に靜臥して夢魂遠く千里に飛ぶは夢の常態なれど、世には睡遊(Somnambulism)てふ奇異の病癩を有するものありて、夢裡に遊行して諸種の言動を演ず。蓋し夢の意識一部の活動なるが如く、これは意識の大部分并に感覺機能の休止せる睡眠中に於て獨り知覺的運動系統の覺醒せるによりて生ずる現象にして、覺めては全く夢中の行動を忘却し、我自ら行ら

て其の我たるを知らず。寢言の如きは其の最も平凡なるものなれど、中には起き出でて滔々と他と議論し、若くは獨り机上に文を稿し、甚しきは戶外に出遊して、亂行を試みるものあり、覺め來りて我れ我が所業に驚く。此の如きは、第一の我の眠りて第二の我の覺め、平生に現はるゝ意識意外の行動を敢てするもの、其最も近き例は之れを催眠術に於て見るを得べし。

催眠と睡眠

睡眠は自然的に誘發せられたる精神状態にして、催眠は人工的に誘發せられたる睡眠状態なり。自然と人工との差はあれ、大體の徑路は之れを同らす。施術者の被術者を眠らんとするや、先づ睡眠の觀念を起さしめ、「眠れ」との暗示を與ふることによつて睡眠状態に入るものにして、普通には被術者をして一の物體——殊に光輝あるもの赤色なるもの——を凝視せ

しめ、又は單調なる音聲を聴かしめ、若くは其の皮膚を摩撫する等の物質的誘因を以て被術者の精神を一方に集注せしめて其他の機能を休止せしめ、さて其の一方に集注したる感官も漸次に疲勞して、茲に全部の機能を休止したる睡眠状態に入らしむ。これを吾等が睡眠に見るに、臥床に入りて自ら睡らんとの自己暗示に基くものにして、單調なる雨聲、感興を惹かざる讀書等は常に其の物質的誘因を爲す。されど催眠は、もと外來暗示の感應に基くが故に睡眠の如く自發的にも、外來的にも活動せざるものと異り、自發的にこそ活動せざれ、心海平靜にして他の觀念の波だつことなければ他の暗示を感受する力強く、被術者の心は全く施術者の心に支配せられて其の命ずるがまゝに行動し、又其の暗示によりて諸種の幻覺を生じ、反古を示して紙幣なりといへば紙幣なりと感じ、水を與へて酒なりといへば、之れを呑んで微醺を帯び、焼火箸を以て棒なりといへば之れを握りて痛さ

を感じざる等、悉く其の暗示のまゝに動き、右せよといへば右し、左せよといへば左す。此時に當りて彼れの心、我が心に入り、自發的なる第一の我は其の影を隠して、彼の暗示に動く第二の我のみとなる。而して殊に強烈なる暗示を與へたるにあらざる以上は、眠時の状態は醒時に於て記憶せざるを常とす。これは他の暗示によりて自己の分裂を招きたるなれど、彼の睡眠の如きは自己の心的作用によつて此の催眠状態即ち眼中の醒覺を生じたるにあらざるか。

人の天降りし話

奇々怪々たるは心の現象、若し此の眠時に於ける醒覺の比較的長さものに至つては、學者の頭腦を苦むるもの殊に多し。「兔園小説」に人の天降りし話を載す。

文化七年、庚午の七月廿日の夜、淺草南馬道竹門のひとりへ、天上より二十五六歳の男、下帶もせず、赤裸にて降り來りて、たゞずみるたり。町内のわかもの、錢湯よりかへるさ、これを見ていたく驚き立ち去らんとせし程に、かの降りたる男は、そのまゝそこへ倒れけり。かくて件のありさまを町役人等に告げしらせしかば、みないそがはしく來て見るに、そのものは死せるが如し。やがて番屋へ昇ぎ入れて介抱しつゝくすしをまねきて見せけるに、脈は異ることもあらねど、いたくつかれたりと見ゆるに、しばらくやすらはせおくこそよからめといへば、みなうちまもりてをる程に、しばしありて件の男はさめて、かうべを擡げにければ、人みなかたへにうちつどひて、ことのやうを尋ぬるに、答へていはく、某は京都油小路二條上の町にて、安井御門跡の家來、伊藤内膳が忤に安次郎といふものなり、先こゝはいづくぞと

問ふ。こゝは江戸にて、淺草といふ處ぞと答ふるに、うち驚きて、頻りに涙を流しけり。かくてなほつぶさに尋ぬるに、當月十八日の朝四つ時比、嘉右衛門といふものと同じく、家僕庄兵衛といふものをぐして愛宕山へ參詣しけるに、いたく暑き日なりければ、きぬを脱ぎて涼みたり、その時のきるものは花色染の四つ花菱の紋つけたる帷子に黒き緞の羽織大小の刀を帯びたりき、しかるにその時一人の老僧わがひとりへ出て來て、おもしろきもの見せんに、とく來よかしといはれしかば、隨ひゆきぬとおぼえしのみ、其後の事をしらすといふ。いともあやしき事なれば、そのものはきたる足袋を、あたり近き足袋あき人等に見せて、こは京の足袋なり哉とたづぬるに、京都の仕入にたがひなしといへり。その足袋にすこしも泥土のつかたてありけるも、亦いぶかしきことなりき。江戸にてはかゝる事あれば、官府へ訴へ奉るが

町法なれば、何と御沙汰あるべきか、その事もはかりがたし。江戸に知音のものなどのありもやするとたづねしに、しる人としては絶えてなし、ともかくも掟のまに／＼はからひ給はれといふにより、町役人等談合して、身の皮を拵へつかはし、官府へ訴へまうし、かば、當時御吟味の中淺草溜へ御預けになりしとぞ。其後の事をしらず、いかゞなりけんかし。(文政乙酉冬十月朔 文寶堂しるす)

愛宕山は太郎坊といへる天狗住めりとは、一般の信憑する所、安次郎、此の山に詣て、老杉古檜の中に一老僧に會せしより、自ら催眠状態を誘致し、諸方を放浪して江戸に來りしは、全く第二人格の活動にして其の淺草馬道のほとりに醒めたる時、第一人格に復せしにあらざるか。其間に於ける記憶は全く忘失して其の如何にして此處に來れるかを知らざるにあらざるか。當時若し今日の如く變態心理の進歩したるありて、何人か之れを研

究の資料に供したらんには、發明する所、少からざるものありしも知るべからず。

五百弗の行方

一千八百八十七年一月十七日、米國のアンセル・ポーンといへる一牧師、プロビデンスに在る某銀行より五百弗餘の預け金を引き出して、其の儘行方不明となれり。當時新聞紙上にも廣告し、警察も亦搜索に力を盡くしたれど、杳として知る能はず。かくて二月ばかりを経過せしにプロビデンスを距ること遠きノリスタウンの地に六週日ほど以前より雜貨並に菓子等を鬻げるブラウンといへる男、或る朝、フト眼を覺して不思議に堪へず、我は何が故に此の地に來り、かゝる業を営みつゝあるや。我はアンセル・ポーンといふ一牧師にして銀行より預金を引出せるまでは記憶すれど、其

後のことを知らずといふ。家主等は大に驚きて發狂者ならんとて醫師に診せしめなどしたれど、餘りに明確に本人の云ふまゝに、電報を以てプロビデンスに照會せしに、其の甥なる人の來りて、アンセル・ポーンに相違なきこと判明したりといふ。心理學者ゼームスは催眠術を施して暗示を與へてブラウン時代のことを想ひ起さしめしに、彼れは歷々とノリスタウンに開店せし當時を語り、醒めては其の間のことに就て何事も知らず。醒中の醒は醒中の醒と連續し、眠中の醒は眠中の醒と連續し、第一人格は常に第一人格に接し、第二人格は又第二人格に接す。此に於て吾等は彼の降神術を行ふ徒の、平時は他と異なるなきも、自ら催眠状態に入りて神靈と交感せる事象に就て説明の曙光を得たるが如きを感じず。されど研究の前途は遠く、不可知の域は依然として大なり。

千里相通ず

予曾て副島種臣氏の『吊阿清文』を讀みて、心と心との千里相通ずるの事實の報ぜらるゝを見る。文に曰く、

三月某夜、夢に季子お清を見る。撫愛切至平日に異る、正に知る始めて病を得るの時なり。厥の後復たお清其姉お堅お直と來り余を拜するを夢む。四月八日夜半、神異眠る能はず、翌朝曉、天神地祇及び祖宗の靈に默禱し、則ち神お清を携へて儼然として前にあるを見る。吾甚だ之れを異とし、諸從士に告ぐ。既にして電報あり、昨夜お清歿すと。即ち客館に位を設け、清酌庶羞を奠むるの時、お清前に立つを見る。お堅お直側に立ち來り享くるものゝ如し。嗚呼東京と上海と相去る萬里、中間大海、而して神氣の通ずる一呼吸を俟たず。神界の神界

たるなり、何ぞ況や事を前知するをや。神爲にあらざるよりは焉ぞ能く此の如くならむ。唯だ吾も清と生別離して其棺殮を親らする能はず、哭して餘りあり。禮に云ふ所、必らず其の形を見、必らず其の聲を聞くもの、吾今其の證人なり。將た何を用ひてか其の靈を慰めん、亦唯だ生々世々人道を保護せんのみ。詩にいふ、

遭遇家不造。 變故頻相因。

千憂逼我心。 百難侵我身。

而吾神道説。 啓發從此眞。

努力復努力。 胡足爲酸辛。

こは副島伯が目に映じたる幻覺に外ならざるべしと雖も、伯が觀念を刺戟して此の幻覺を生ぜしめたるもの、伯自身の觀念の力のみとは云ふ能はず、父を慕ふ子の一心の伯の觀念を動かすに力あるものあるにあらざりし

か。異郷に留學せる學生が髣髴として父母の幻覺を生じて、後、其の訃音に接し、戰地にある軍人の家族が夢に其の姿を見て、殆ど同時に死せりととの報を受けし如きの例、單に偶合の事實とのみ見る能はず。一方の心的狀態が感受的となり、他の心的狀態が暗示的となることは彼の無線電信の一方が發電狀態となり、他方が受電狀態となる時、相感應するが如きものあるにあらざるか。普通の場合には雜念跳梁して心海平かなる能はず。且つ感官によりて掣縛せられ、自我の意識によりて統一せらるゝが故に、彼他彼此の區別に制限せられて感應することなきも、彼の副島伯が初めには夢裡に見、後には神前に見たるが如く心の平靜なる時に相通するものあるにあらざるか。

天眼通

碧潭、澄んで鏡の如く、沿岸の風景、落ちて其の中にあり。空飛ぶ雁も其の影を宿し、淵に住む魚も點々算すべし。吾等の心、若し此の状態に入るを得ば、彼我の差別、没して千里も亦寸心の中に收むるを得べきにあらざるか。世の所謂千里眼なるものも、亦無念無想の域に入るべきをいひ、菩薩の天眼通も亦天然の慧性、徹照無碍なるをいふ。吾等は研究未だ精ならざる是等の問題に對して容喙するの權能を有せざれど、世に透視の事實あり、催眠に千里眼の状態あり。聖者に神通の跡傳へらるゝ以上、隠れたる吾等の力の益々偉大なるを感ぜざるを得ず。瑞典の神祕哲學者スエデンボルグは、ストックホルムを距る三百哩のゴッテンブルヒといふ地に赴きて或る紳士の招待を受け、晚餐の卓上、忽ち不安の色を面に現して、突然「今ストックホルムは焼けつゝあり」といひ、續いて「嗚呼予の友の家は焼けたり、予の家も危し」といふ。一同は其の意外の言に驚きて敢て慰むるものも

なく、唯だ呆然たりしに、宴終るの頃、安心の態にて「漸く鎮火したり、予の家より三軒目の所にて消し止めたり」といふ。當時、兩地の間は通信の便悪く三日を経て初めてストックホルム大火の報告に接し、且つ其の云ふ所のスエデンボルグの語りし所と寸毫の差なきに驚きたりと。吾等は之れをも偶合の事實なりと斷却するの大膽を有せず。

感應

感は牽召の義、應は赴接の義。彼れ牽いて我れ赴き、彼れ召して我れ接す。心は一氣、各人個々の心を貫通して互に脈絡相應するものあり。昔茶山の『筆のすさび』にいふ、

凡そ天地人は一氣にて、此に呼べば彼れに應へ、感ずれば通ずる類にて一も驗なきはあらず。肉眼ことごとくを見ることを得ざる故なるべ

し。或は萌して變じ、或は萌さずして忽然と出来るもあるべし。故にことごとく之れを見ず。見ても信ぜず、意とせざるにや。俗諺に人を誹らばめしるをわけ、呼びにやるより誹るが早きの如き、其の人來らんとするの機、既に之れに應へて、覺えず知らず其の人を思ひ出づるに、よりて誹謗の言も出だすなり。此等のことにて思ひ半に過ぎんか。心と心との感應、吾等は此にも強烈なる心の常に微弱なるものを支配するを看取せずんばならず。

怪知るべきか

心靈の怪、得て知るべきか。吾等は一切の怪現象を抹殺して、現代の智識を以て悉くを解説了し得べしとは信ぜず。されど又怪は依然として怪にして智識の外に出づとするの説に左袒する能はず。解し難き心も、分

析せられ綜合せられて紛然難然たる中にも、一脈の理路の見出されしは研究の結果にして、往日の怪も、今日に於て尋常茶飯の事として説明せらるるもの少からず。迷妄の間は智識の光を以て照らさざるべからず、神祕の雲は研究の力によつて開かれざるべからず。心靈の怪、今日に於て解説し得ざるもの多し。然れども解説を許さざるにあらずして解説の到らざるなり。未だ到らざる所に歩を進めんとする學者の努力は、刻一刻、靈怪の域を縮小し、日に進み月に歩みて、解説の領土を擴張するを疑はず。今に於て知り了れりとするは妄なり、終に知るべからずとするは痴なり。唯だ知り得られざるものは、研究せむとする吾等と其の境地を異にせる生前死後の問題なり。生前死後は、唯だ推理すべきも、實驗する能はず、想像すべきも證明する能はず。若し信仰の念の其の間に迷入なくんば、吾等は千古萬古、生の前に冥く、死の後に冥からん。

靈魂

幽靈と靈魂

幽靈に關する通俗の信仰は死者の靈魂の生者の面前に現はるゝものとして信ぜらる。靈魂果して身體を脱出して能く遊離し得るものなるや、抑も亦身體以外別に靈魂なるものありや、若し之れありとするも能く身體死滅の後に於て存在し得るものなるや、存在し得たりとするも、世に傳ふるが如く吾等の感覺に入り來るが如き形體を有するものなるや。これ頗る興味ある問題にして、しかも千古未決の懸案なり。よし多くの幽靈現象は觀念より誘起せる幻覺として説明し得るも、死後の状態は生者の經驗以外に投げ出されて、靈魂其者の存否も容易に決せられざる難解の謎たり。されど

吾等の智識は現在の經驗に立脚して其の所謂靈魂なるものゝ通俗の迷信せる如き個體的存在物にあらざるを證明し、幻覺以外に死人の靈の生者の如き状態に於て來往するものに非ざるを論定するに於て支障なきに至れり。

靈魂の觀念

吾等は生時に於ては心のまゝに言動し行爲す。しかも死後に於ては身體の生時に異ならざるものあるに拘らず、毫も言動せず行爲せず。死の當時に於て其の身體生時と何の異なるものかある。唯だ僅に温かゝりし身の冷却し、呼吸したりしものゝ呼吸せずなりしのみ。之れによつて彼れ言はず彼れ動かず。此に於て原始民族は死を以て靈魂の身體より脱出し去れるものとす。彼等が此の身體以外に靈魂なるものゝ存在を假定せしには諸種の因ありと雖も、其の主要なるものはスペンサーの所謂陰影、照影、夢並に癡

癡失神等の病的状態を目撃せしに由る。陰影は光線を遮閉せるによるといへども、彼等は其の身體と常に相隨伴するを見て我が身と不離の一物ありとし、水に映れる我が影即ち照影を見ては、我が身に附隨せるもの、飛んで其の中に入りしと見、こゝに現在の我以外に、潜在的なる別我の存在を假定し、殊に身は臥床にあつて遠く山河を跋涉し、親しく故人に接せる夢なるものを見ては、其の一物の身體を脱出して遊離し來れるなりと想像せざるを得ざりしなり。癡癡失神等の場合に於て全く氣を失へるもの、暫時にして癒し來るに接しては益々此の觀念を固め、其の失神状態の永續的となりし死を以て靈魂の脱出なりと想到したるは、幼稚なる彼等の推定としては無理ならぬ順序にあらずや。

死後の想像

さて然らば身體を脱出したる靈魂の如何になり行くや。想像は更に想像を生み、或は動物の體內に入りて其の心靈となり、輾轉して終に又人の體に宿るとし、或は死者の靈は死者の靈のみ棲息せる社會即ち冥土又は幽府黄泉若くは夜見國なるもの存せりとし、其の道德的因果の觀念の加はりては、生時に於て善を行ひしものは樂しき國に生れ、此の世に於て惡を犯せしものは苦しき境に落つとし、こゝに天國(極樂)地獄の想像を描き、一は觀樂の極にして他は苦患の極とし、聖者は之れを以て人を導き、人類生存の慾望は又此の死後の生活に想到して、幽界の思想は古今を貫き東西に互る。然れども、之れ吾等が經驗以外に存し、之れを實證する能はず。世には冥府の談を傳ふる少からざるも、多くは其の人の催眠状態より生ぜる幻覺に外ならずして、專念佛神を想うて終に其の示現を受け、又は平生意識の下に潛める思想の失神の場合に實現せられ、醒めて冥府の狀を語るの類、皆

其の人の心的状態と隔離せざるに於て首肯すべきものあるにあらずや。彼のしばし冥府に來往し、細さに其の状を語るもの、如きも彼等が心より産み出せる夢幻を語ると見る以外、吾等は何の信憑すべき根據を認めず。唯だ變態心理の研究に多大の資料を供するを見るのみ。

神界物語

紀州和歌山西瓦町黒江屋辰右衛門四男幼名を善竟といひて、西栗寺といへる淨土宗の小僧たりしが、嘉永四年三月十日(時に年十七歳)、夢に尊き神仙來り、翌日又來りて花山といふに連れ往かれ、雲に乗じて日向の赤山といふ仙境にて清淨利仙大神といふに合し、歸りて島田幸安と號して醫を營み、しばし幽界に來往し、死者の靈に會して問答せる事蹟を記述したる「神界物語」なる一書(寫本)世に行はる。彼れは楠公と語り、家康と會し

たるなど眞面目に示されたるが、同書の中に、或る人問ふ、

「汝、毎々神仙の幽塔へ往來せる由、其の時は何様の術あつて行き候や。」
幸安いふ、

「いつにても聞き夜、又曉の頃に仙人の方より御指圖ありて行き申し候。大抵一六の日に參る定めなり。私より行きたしと思ひて行く術は御坐な候。參るべき用事出來る時は必らず現界のことを御察しなされ候。御案内がある故に參り申候。尤も山人と申すに伴はれ、雲へ登り虚空を歩き、暫時に仙境へ行き申し候。其の時は私の體も持ちたるものも皆人間の目には見えぬ様に成り申候。又此の中に私が形骸は家内に寝て居ながら魂氣ばかりが抜け出て參ることもこれあり候。」

問ふ、
「然るときに身は死體と相成候や。」

答ふ、

「深く寝入りて何程ゆすり起すとも起き申さず候、然れども呼吸ありて生きたる骸なり。」

これ豈に幸安が眠中に於ける醒覺を語るものにあらずや。事、若し幸安の山師的行動にあらざれば、心の變態より幻出したる物語のみ。

スエデンボルグ

スエデンボルグは尊敬すべき碩學なり。彼れの生活は清淨に、彼れの研究は精緻にして殊に其の前半生に於ける數學科學の造詣は一代に雄たるものありし。彼れに此の素養あり、而して後半生に於て彼れは更に眼を靈界に注ぎ、一隻の靈眼、塵界を超絶して幽界と交通するに至りて、一千七百四十四年、彼れは倫敦にありて深遠なる思索に耽りつゝ形而上學の著述に

心力を注げる或る日の事なりき、彼れは平生の如く晚餐を喫せんとて食卓に向ひ、將に終らんとする時、朦朧として我が眼の掩はるゝを覺えしが、やがて復び明かとなりて、突然室の一隅より「食を過すこと勿れ」と聲かけし異形の人を見、翌夜も亦其の人の現れて「我は神なり主なり、世界の創造者にして救済者なり、我は聖的の靈的主義を人間に傳へんとて汝を撰みたり」といひ、次て天國地獄の狀況は彼れの前に展開せられ、爾來彼にはしばしば靈界に來往して、其の觀察を記述したる「天國と地獄」の如きは實に宗教史上に一異彩たり。彼れの云ふ所は精細にして其の論ずる所は深遠、整然たる系統は其の哲學の上に現れ、敬虔なる宗教的靈感はその記述の上に迸るも、吾等は其の謂ふ所の天國地獄を以て、實在のものとする能はず。皆これスエデンボルグが主觀の反映にして、彼れの人格の之れを造り上げたるものたるを疑はず。人若し之れ汝の凡眼の見る能はざるのみ、靈

眼に於ては確に存すと云はゞ、吾等は暫く其の凡眼の名に甘んぜんのみ。

地獄極樂

人類の富贍なる想像は苦の極を寫して地獄となし、樂の極を寫して天國とす。天國も地獄も皆其の思想の上の幻影なりと雖も、敬虔なる宗教的信念を有するものは、之れを實有の境として以て自ら戒飾す。惠心僧都の「往生要集」は地獄中の最も苦境たる無間地獄を寫象して凄慘を極む。

彼の阿鼻城縱廣八万由旬、七重鐵城七層鐵網下に十八の隔あり、刀林周匝四角四銅狗あり、身四十由旬、眼電の如く、牙劍の如く、齒刀山の如く、舌鐵刺の如し。一切の毛孔より皆猛火を出す。其烟の死惡なること世間に喩ふるなし。十八獄卒あり頭羅刹の如く、口夜叉の如し、六十四の眼あり、鐵丸を迸散し、鉤牙上に出て、高さ四由旬なり。牙の頭より火流れて阿鼻城に滿つ。頭上八牛頭あり、一々の牛頭に十八角あり、一々の角頭より皆猛火を出す。又七重城内に七鐵幢あり、幢頭火踊猶ほ沸泉の如し、其炎流進して亦城内に滿つ。四門圍上八十釜あり、

といひて苦の極を寫し了る。而して之れに赴くものは皆之れ現世に於て惡業を重ねしものと説く。畏友鈴木大拙氏の著「スエデンボルグ」は、彼れが地獄觀を紹介していふ。

或る地獄は岩間にある窟の如く、洞穴の如くにして内に向ひ、其後轉じて斜となり、或は直下して遂に無底の淵に入る。或は猛獸の森中に住める如き洞穴及び窟に似たるあり、或は鐵穴の如く孔道下に通じて地窖及び窮穴に似たるあり。大率地獄は三層となれり、上層は黑暗暗なり、そは此處には惡よりする諸僞に在る者住めばなり。下層は火に似たり、そは此には惡其ものに在る凶靈住めばなり。何となれば黑暗々は惡よりする諸僞に相應じ、火は惡其ものに相應すればなり。地獄の深き處には、其行動惡に基きてその内分よりこれを爲せるものなり、されど深からざる處には其行動亦惡に基けども、只その外分よりせるものなり、これ

即ち悪よりせる虚偽に基きて行動せるものなり。或る地獄には恰も火災後の家屋及び市街の焼残の如きものありて、凶靈此中に隠れ住めり。寛かなる地獄には恰も粗造の小屋に似たるものあり、或は連接して一箇の都市をなして道路通ぜり。屋内に住める凶靈間斷なく闘争し抗敵し、相撃ち、相戦ふ。道路には盜賊、槍剣横行す。或る地獄には只淫房のみあり、汚穢と糞土とに充てり、面を向くべからず。又茂れる森あり、凶靈此處に徘徊すること猛獸に似たり。又此地下に洞穴ありて、他のために驅逐せらるゝ時彼等此裡に隠る。或は地瘠せて、砂のみなる砂漠あり、或は岩石亂立して洞穴を有せるあり、或は小屋の立てるあり。極度の實罰を受けたる凶靈は地獄より逐れて此の如き荒野に投げ棄てらる。特に世にありたる時欺巧を弄し、騙詐を企むと他に勝れて妙を盡せる者は、此に來りて彼等が最後の生涯を營むものとす。

同じく天國に對しては「われ天界にてその崇大なること言語に絶えたるばかりの宮殿を見たることあり。其上方は精金にて造れる如くに光を放ち、其下方は寶石より成れるが如かりき。諸房内部の裝飾に至りては、之を記すべき言語なく、又知識あらず。南方に向へる處に樂園あり、此に在る一切の事物亦前と同じく光耀陸離たり。ある處には銀の如き樹の葉あり、金

の如き果實あり、花壇にある花の色は紅霓の如く見えぬ。望極まる處に疆界あり、疆界の彼方に又宮殿あり。天界の建築は實に美術其物なりと思はるゝばかり也」と説く。

釋尊長老舍利弗に告げて、細に極樂の莊嚴を語りたまふ。「佛說阿彌陀經」の華麗なる文字は之れを示す。

是れより西方十萬億、佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂といふ。其の土に佛あり、阿彌陀と號す。今現に在して法を説く。舍利弗よ、彼の土何が故に名けて極樂と爲す、其の國の衆生、衆苦あるなし、但だ諸樂を受く、故に極樂と名く。又舍利弗、極樂國土、七寶の池あり、八功德水、其の中に充滿す。池底は純ら金沙を以て地に布き、四邊の楷道、金銀瑠璃玻瓈合せ成り、上に樓閣あり、亦金銀瑠璃、玻瓈、磲磔、赤珠、瑪瑙を以て之れを嚴飾す。池中の蓮華、大なること車輪の如く、青

色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔たり。舍利弗よ、極樂國土是の如きの功德莊嚴を成就す。……又舍利弗よ、彼の國常に種々奇妙雑色の鳥あり、白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、加陵嚩伽、共命の鳥、是の諸の衆鳥、晝夜六時、和雅音を出す。……又舍利弗よ、彼の佛の國土、微風吹いて諸の寶行樹及び寶羅網を動かし、微妙音を出す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し、是の音を聞く者、皆自然に念佛念法念僧の心を生ず。

譬喩の中に哲理あり。これら聖者哲人の示す所、皮相の觀察を以て評論する能はずと雖も、人類の最も欣求する所の快樂と、厭離せんとする苦患とも示せるや疑ふべからず。吾等は之れによりて道念を鞭つべく、信仰を奨すべし。其の有無に至つては其の人の心に尋ねざるべからず。

地獄極樂の有無

人あり、智藏和尚に問ふ、「地獄ありや」と。藏いふ「有り」と。其の人怪みていふ、「曾て徑山和尚に參じて問ふに此の事を以てす、和尚有ることなしといふ、同一佛法中此の相違ありや」と。藏いふ「汝に妻ありや。」其の人いふ「有り。」更に問ふ、「徑山和尚に妻ありや。」其の人いふ、「和尚固より妻あることなし。」藏いふ、「徑山和尚地獄なしといふことは得たり」と。意は有無其の人にあるをいふもの。林大學頭、眞宗の大徳香樹院上人に云ふ、「佛者地獄を説く、我れ其の有るを思はず」と。上人いふ、「衲も亦有ることなきを思ふ」と。大學いふ、「上人常に人に向つて地獄を説く、今有ることなしといふは何ぞや」と。上人答へて、「罪あるものに牢獄はあり、罪なきものには有るも無きに同じからずや」と。これらの話頭よりも更に興味あ

るは白隠禪師の逸話なり。尾州藩士織田信茂參勤の途次、原驛に禪師を訪ひ、「地獄極樂、抑も有か無か、心甚だ迷ふ。希くは禪師の示教によつて疑團を除くを得ば幸福之れに過ぎず」といふ。禪師聽き終つて大聲一番、

「汝は何者ぞ。」

といふ。信茂聲に應じて

「武士でござる。」

「ナニ武士とな、武士には武士の道がある。君の爲に忠勤を抽んで、事あれば身を鋒刃に委すれば足る。何の暇あつてか、餘道に心を勞する。汝、若し武士ならば山伏か野伏士か。」

信茂、怒りを忍びて更に教を請ふ。禪師輕侮の意を示していふ、

「まだソナナことをいふか、山伏野伏士は人間の仲間ぢやが、汝の如きは鯉節位であらう……鯉節なら臺所の用に立つが、世間の用にたぬ汝の

如きは食ひつぶしてある。忍びに忍びし信茂の堪忍袋も、今は破れて、

「食ひ潰しとは何でござる。」

「食ひ潰しだから食ひ潰しと申したのぢや。」

と、禪師の答ふるや否や、

「己れッ。」

と云ひさま、鞘を拂ひし三尺の秋水、眞向に切り下げんとするに、禪師は驚いて逃げ廻り、

「恐ろしやな、これが地獄。」

此の一言に、さては教示を垂れたまひしかと冷汗背に流れ、刃を収めて低頭其の罪を謝せば、禪師は平然として、

「これで極樂。」

地獄遠きにあらず汝の心にあり。極樂何ぞ十萬億土を尋ねん、唯心の彌陀己心の淨土は汝の前にあり。有りといふも心を離れず、無しといふも亦其の心のみ。

靈魂と死

靈魂の有無は先づ靈魂其の者の解釋如何に立脚するにあらずんば、容易に解答を與へ難し。若し靈魂を以て原始人類の想像したるが如く火の如く風の如き一個の形體を有するものにして時々身外に脱出するものとせんか吾等は之れを現代の生理學に問うて、かゝるものゝ存在を否定せざるを得ざるも、之れを以て吾等が精神作用の中樞とせんか、吾等は彼のヘッケルが「若し心靈、精靈又は魂魄なる多様の概念を狹義に解釋し、之れを以て高等なる精神の活動なりとせば、吾等は我が人類及び他の哺乳動物に於け

る心靈の器管を以て大脳皮中フロネーテンを包括しフロネマ細胞より構成せらるゝ部分なりと認めんとす」てふ言に傾聽せざるを得ず。然れども此の意味の靈魂は死後に於て永續せらるべきにあらず。ヘッケルはいふ、「此のフロネマが思想の器管たるは、眼が視力の器管たり心臟が血液循環の中樞器管たる」と其の意義相同じく此の器管の破壊すると共に其の活動も亦消滅するなり」と。身心もと不二、内より見れば皆心ならざるはなけれど外より見ればこれ皆身。身の生理的體制ありて心の活動はあり。此の身を離れて此の心なく、此の心を離れて此の身なし。此の二者もとより分離すべからざれば、死後此の身體の壞滅して靈魂のみ存在せりとは推理し能はざることにあらずや。此の二者を分離し靈魂を以て肉體を離れても、獨立して能く感覺し思考し行動する非物質的のものなりとせる思想は長く世人の信仰を繋ぎたれど、死は決して彼等の想像するが如く靈魂の脱出にあら

ずして生活力の喪失なり。吾等が生時に於ては我が身心は絶えず外界の作用に對して調整を試み、食物の同化、老廢物の排泄、酸素の吸入、炭酸瓦斯の呼出、其他運動感覺等の作用を營める一定の體制を有したれど、此の體制破れ、此の活力を失はるゝに至りて、此に死なる現象を開始したるのみ。

死は斷滅か

體制破れて我といふ身體なく、活力失せて我が心なるもの、殘存するにあらざるも、死は一切の終りにあらず。此の體制を組み立てたる原形質は依然として存し、之れと表裏せる個々の活力は之を有す。我が形體は變化すべし、しかも全く斷滅したるにあらず、物質の不滅なるが如く不滅に、勢力の恆存なるが如くに恆存なり。調整せられたる我が身の體制は亡び、統一せられたる我が心の活動は止みぬ。されど其の物と力とは終に亡ぶこ

となく、止む時なし。吾等の身心の不滅なるは之れのみにあらず、親より子、子より孫と傳へらるゝ一種の繼續は實に吾等の身心を永久に傳ふるものにあらずや。生前死後に互りて久遠の昔より永劫の未來に傳はりて滅することなし。更に見よ、吾等が此の世に於ける行動は永く社會に印して心より心に傳はる。個人に死して社會に生くる志士仁人の芳躰は之れを示して餘りあるにあらずや。

因果相續

吾等が死後に遺るものは、物理學的若くは生物學的の繼續のみにはあらず。吾等が此の世に遺せる足跡は天地と俱に消ゆることなく、吾等が此の世に行へる一舉一動も亦無窮に傳へられて因より果を生み、果より因を産して終に斷ゆることなし。燃焼せられたる石炭は灰となり了るも、其の間

に起されたる力は能く水をして湯たらしめ、湯をして蒸気たらしむ。水は死して湯となり、湯死して蒸気となる。蒸気は消散し盡すも、其の間に汽車は幾百里を走りたるにあらずや。氣盡きて車止るも、乗りたる客は既に遠さに達せり。吾等の言動も猶ほ且つ此の如く精到に因果關係を質さんか、一言の微一行の細といへども、形は變じ姿は異るとも、斷じて滅するものにあらず。誰か之れを想うて肅然として襟を正さざるものあらむ。

死後の靈魂

死は人情の最も厭ふ所、當然免る可らざることは知りながらも尙ほ一日も長く生存せんことを欲し、死しても亦其の存續を考へずんば無限の寂寥を感じ。死後生活の信仰は人の至情より出て、延いて現世の生活に影響すること少からず。されど又理に合せんとする要求は、初めは生時と異ら

ざる個體我の存するとせしものも、終に細身の説を立て、肉眼に見る能はざるほどの微細の身體存せりとす。印度の僧侶哲學の如きは即ち之れにして、吾等の肉體は現に見らるゝ如き龜身の外に細身の存在して輪廻轉生すべきをいひ、其の細身を説ては心的知覺なる大と心的執著なる我慢と、色聲香味觸の五より成るものにして其の體頗る微細にして見る能はざれど、手足顔面腹背等の形態を有し、龜身は死によつて腐敗すれども、細身は死と共に滅するなしと説く。原始佛教に於ても、經量部に於ては細意識なるものを立て、前生より後生に通ずとし、小乗有部に於ては人類生死の状態を四期に分ちて、

- 一 本有 生より死に至るの間。
- 二 死有 將に死せんとする一刹那。
- 三 中有 死して未だ生れざる間。

四 生有 將に生れんとする一刹那。

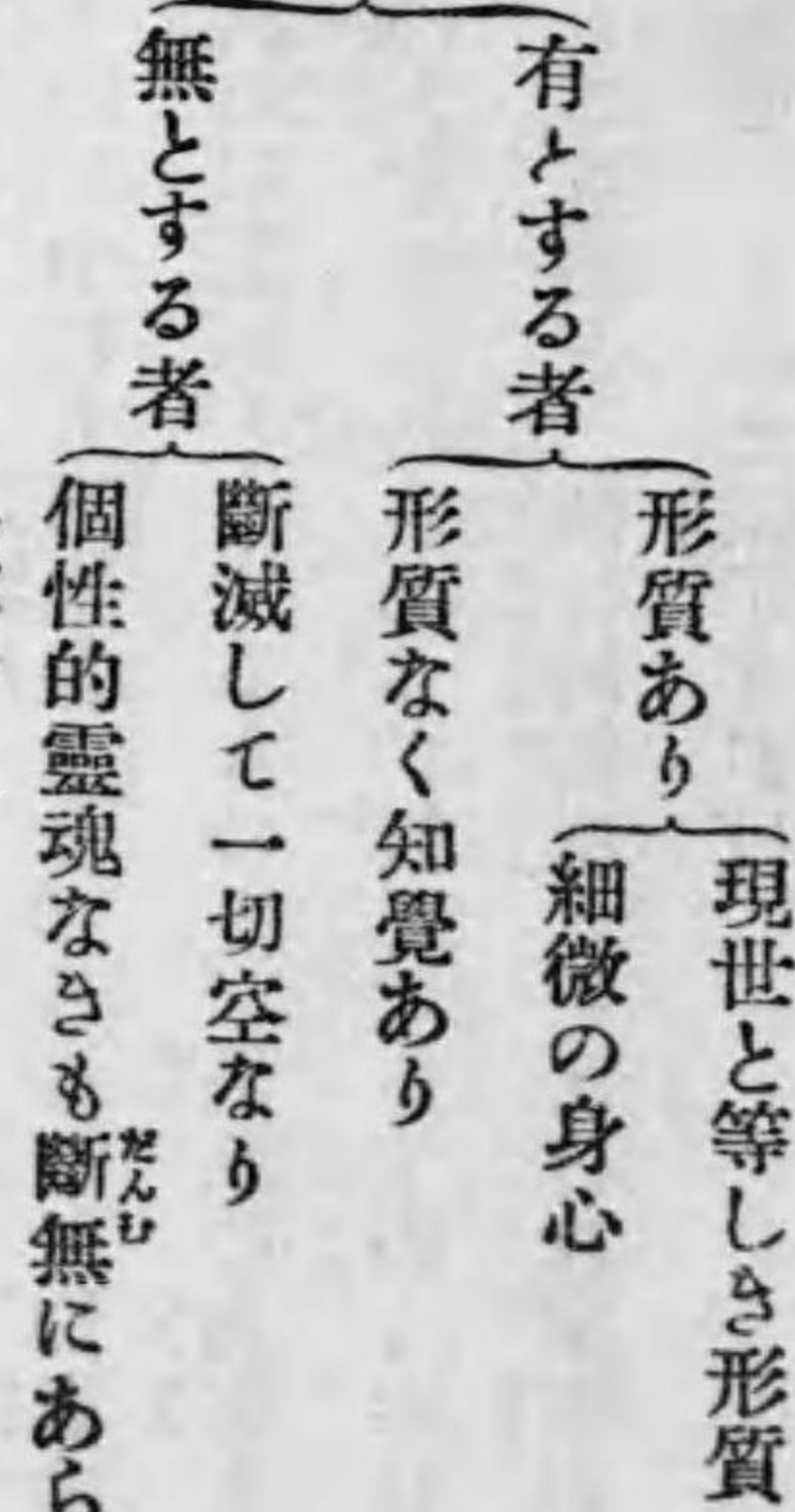
とす。中有の心身は微細にして見る能はず、香を以て食とすといふ。幽靈の觀念は此の中有の思想と關聯す。而して其の生死に於ては六道輪廻の説を立て、行爲の善惡により天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄等の境界に轉生すといふ。しかも其の轉生後に於ては前生の記憶悉く忘失せらるると説き、之れを隔生即忘といふ。希臘には死者の生れんとするや、「忘れ川の水を呑みて前世のことを忘却するとの神話あり。哲學的に思索を運らすものは、或は之れを心的分子とし、或は個々の心識以外に大なる心を立ててこれに没入すといひ、時に又吾等は生前に於ては全く睡眠の状態にあり、生時は醒睡相半ばし、死によつて全く覺醒の域に入るといひ、幽玄微妙を究め、佛教も亦小乘より大乘に進みては、心を論ずること益々精緻にして阿頼耶識以上に如來藏心を説き、總該萬有心を語り、庵摩羅識を立て、個

個の靈魂は其の現相にして、別に不生不滅にして、活潑潑地なる天地の大靈あるをいふ。靈魂の問題は終に天地の心に想到せざるを得ず。天地の大靈として誰か又不生不滅を疑はむ。

靈魂説の歸趣

死後の靈魂に關する諸説は區々たりと雖も、試に東西古今の學説を検するに、其の期する所は、死後靈魂有りとするものと無しとするものにして、有りとするものゝ中にも形質ありとするものと知覺のみありとするものとの別あり。其の形質ありとするものも、現世の肉體と同じとするものと、細微なるものとするものもあり。無とするものゝ中にも、一切皆空、何の有るなしとするものと、個性的靈魂こそなければ宇宙の大意識に没入すといふものとありて、これを表示すれば、

死後の靈魂



个性的靈魂なかも斷無にあらざ

の如しと雖も、他人の死は我が實驗を資せず、現在の我を以ては、我なるもの、死後を経験し得べきにあらざれば、其の知られざるや一。近世の大哲學者カントの死後の問題は經驗を超越したれば純粹理性に於ては其の存在を證明する能はざれど、實踐理性に於ては之れ有りとするにあらざれば道德の基礎に不充分を感じずと云へるに多大の興趣を感じざるを得ず。永久の生命に關する信仰は人生の活力。唯だ之れをして迷妄に陥らしめざるが先覺者の職分にあらざるなさか。

雨傘の用意

木戸孝允の養子正次郎、曾て宮城時助と未來生活の有無に就て激論す。

孝允之れを聞いて先づ正次郎に問ふ、

「汝は有るといふのか、無いといふのか。」

「ハイ無いと存じます。」

「屹度無いと云ふのか。」

「屹度と申して實驗したことがないのですから、まア無いだらうと思ふのです。」

「宮城君は何と思ふのか。」

「私は有ると信じます。」

「屹度か。」

「屹度と仰しやつては困りますが、まア有るだらうと思ひます。」

「それでは兩人ともだらう議論だね。」

「左様いへばそんなものです。」

「そんなら今外へ出ようとするのに、空が曇つて居るで、雨が降るだらうか、降らぬだらうかとの争ひと同じやうなものだ……ソコデ此の場合、お前方は雨が降ると決めて傘の用意をして行くか、降らぬと決めて傘も持たずに出るか何うだ。」

「それは降ると決めて傘の用意をして参ります。」

「そんなら有ると決めて地獄へ落ちぬ用意が肝要ぢやないか。」

こは傳聞の一話なれど、此の事若し真なりとせば木戸孝允は人生觀に於て確に一隻眼を有するもの。死後の問題は死後の問題にあらずして現在の問題なり。極樂地獄の説は常に現在道德と因果的關係を有す。現在に於け

る我が行動にして俯仰天地に恥ぢずんば地獄ありと雖も何の恐るゝ所かあらん。傘は手にあり、降雨又何かあらん。

妙好人

死は理論にあらずして事實なり。如何に理を論ずること精細なるも、此の事實に當つて迷ふ所なきにあらずんば實社會と何の涉るなし。吾等は無神論者が其の死に當りて、思はずも「神よ」と絶叫したりてふ一話に無限の興趣を感ず。これに比しては一文不知の田夫野人が未來を信ずることに於て何の煩悶なきを羨まざるを得ず。讚州高松に與吉といへる妙好人あり。彼れは目に一丁字なけれど佛を信ずること深く、未來は佛の力に縫りて極樂淨土に往生すべきを信じて疑はず、其の客舎に病を得て死に瀕するや、左右の人の「氣の毒に歸りたからうに」といふに、與吉は平然として「いやい

や何處で死んでも阿彌陀様の御側に行くのだからかまひませぬ」と。かくて彼れは莞爾として逝けり。彼の法然上人が配流に遇ひたまひし時、人に與へて、

露の身は此處彼處にて消えぬとも

こゝろは同じ花のうてなぞ

と詠みたまひしと其の心を一にせるものにあらずや。若し夫れ死生一如の理を體得するものに至つては、又別趣の存するを見る。

生死透斷

寄せては返す波に去來の相あるも、水に生滅なきが如く、死生は唯だ之れ波、何をか喜び何をか悲まんとは、少しく心を理の上に運らすもの、感じ得る所なるも、生死交謝の時、能く此の覺悟を持續し得るもの果して幾

人ぞ。烏丸光廣卿は文學の雄。しかも其の死生の間にて自ら釋然たるものあり。死に臨みていふ、

涅槃生死。 昨夢驚回。 快活快活。 走却香臺。

香臺を走却して何れの處にか行く。寂々として眠るが如く、呼吸絶えて死すること多時。忽ち眼を開いていふ、「我、未だ官を辭せず、擅に冥府に赴くべからず」と。急に人を馳せて之れを奏せしめ、復た寂然として逝く。黄蘗の即非、臨終、筆を執り、

生如是。 死如是。 坐斷生死關。 解破沒巴鼻。

書き終りて茗を啜り、「快哉」と呼んで香烟の間に寂す。生も如是、死も如是。是の如きに至つて生死真に一如、風靜にして水波動かざるの觀あり。

祝杯

「如何なる真理も人生と何の相渉るなくんば、何等の價値をも有せず」といへる實際主義者の言は死生の問題に於て大に味ふべきものあり。死後の想像は現世を戒飾し、一如の感は生死の繫縛を離る。戒飾せらるるが故に一言の微も之れを謹み、繫縛を離るゝが故に生死以上に著眼すべし。生くべくんば生き、死すべくんば死す。大丈夫眼中死生なし唯だ道あるのみ。其の生何の爲ぞ、「君子一日生くれば一日世に利あり。」其の死何の爲ぞ、「死する時に死せざれば死に優るの恥あり。」此の生惜まざるべからず、此の死辭するに足らず。清き心は清き未來を産み、穢れたる心は穢れたる未來を現す。其の死來るの時、汝、徐ろに其の生涯を追想し來つて彼の羅馬第一の皇帝たりしオーガスチンが、自己の生涯に爲せる事業を聽き畢りて「祝杯！」と叫び得たる如きものあらば汝の當來は祝福せられむ。

世の心

社會の心

人皆心あり、各々其の趣向を同じうせず。しかも異中同あり。相集つて社會を成す。社會は心と心との集團、而して其の集つて成れるものは又個々の心と同じからず。個々の心は社會の心に入り、社會の心は個々の心を含むが如く、鏡々照破して個々の心と異にして同、同にして異なる社會意識 (Social Consciousness) 又は社會心 (Social mind) なるものを生ず。自繩自縛、自ら造りて自ら脱する能はず。浮世の義理に身を苦め、世間の手前に心を勞す。面白きは世態、奇なるは人情。しかも此の心は遠き昔よ

り傳はり來りて牢として抜くべからず、廣き集團に行はれて獨り離れ難し。習慣はその成形、儀禮はその實現。吾等は實に其の中に壓迫せらる。

社會の心と個人の心

個人の心より成る社會の心は、又個人の心の如く理智あり、情意あり。理智の判斷の共通に加へられては輿論となりて人を動かし、個々の人心を征服して翕然として之れに赴かしめ、苟くも之れに反するものは之れを社會の埒外に脱出せしめずんば止まず。情意の働きたつては一齊に喜怒哀樂し、喜ばざるものは當該社會の人にあらずといひ、悲まざるものは沒人情漢として度外視して、毫も各人特殊の個々の事情を顧みず。而して又個々の各人も其の共通感情に暗示せられては、全く自己の事情を忘却して之れに喜怒哀樂す。世を擧げて凄慘の氣に襲はれ、世を擧げて歡樂の

情に滿つ。感染最も速にして傳播頗る早し。

國民性、民族性

人の集團一にあらず、等しく社會といふ小あり大あり。一郷一村も一社會なり、一國一郡も一社會なり。廣くいへば世界も亦一社會なれど、吾等が生命財産自由の保障せられて棲息し得るは國家なる體制を有せる社會に由る、が故に利害關係最も密にして其の思想感情の共通も一層痛切に、ここに國民性なるものを形成す。殊に其の國家が同一民族の上に成り、同一歴史を有する國民の集團なるに於ては其の共通いよく多く、更に其の國家が長く其の領土と不離の關係を有し、山川風土の影響相同じき住民を有するに於ては、一種抜くべからざる社會我を生じ、他の民族、他の國家、他の土地と大に異なるものあるを見るに至る。大體の色彩に於ても、東洋

人と西洋人と其の性情の異なるものあるは見難きにあらず、同じ西洋人の中にもスラブ民族の氣風と、ゼルマン民族の性情と、ラテン民族の好尚とは相同じからず、同じゼルマン民族に列せらるゝとも久しく大陸に棲息せし高地ゼルマン族なる獨逸國民と、夙く海島に出てたる低地ゼルマン族たる英吉利國民との頗る異なるは何人も目睹する所。等しく東洋といふとも、支那民族と我が日本民族とは全然趣を同じうせざるものあり。民族、地理、歴史の三者は實に國民性をして異らしむる所以。同じ基督教にてもラテンは多く加特力教に歸し、ゼルマンは多く新教に趨り、スラブは多く希臘教に赴き、等しく共和政體なるも、米合衆國民は其の大統領を見る我が友の如く、佛蘭西は公選せられたる帝王の如きもの、此の國民性を見、民族性を察すべきにあらずや。

血より傳はる

人口の増加と共に民族の心は血より血に傳はりて二は四となり四は八となる幾何級數を以て擴がり、父より子、子より孫、孫より曾孫と傳へ傳へて個々の人心の奥底に潛み、幼時より耳にせる傳説は此の心を培ひ、長じて讀む所の歴史は此の心を養ひ、或は有意識的に或は無意識的に心より心に傳はりて此の民族性を助長す。同じ血に成れる偉人の先蹤は我を勵し、同じ血に成れる民族の興亡は我を喜怒せしめて、終に民族共通の思想感情となりて表現せらる。

地と人

民族統一の思想は、現代に磅礴たるものありと雖も、現代の國家は必ず

しも同一血族によりてのみ組織せられず。土地を割して領域を定め、其の區劃内の住民を統治す。しかも此の同一土地に棲息せる一事は又其の住民の心を共通せしむるに偉大の力を有す。海洋の一孤島に棲めるもの思想と、廣漠たる大陸に棲めるもの思想とは同じからず。巍峨たる山脈を以て圍まれたる國民の心と淼茫たる海洋に面せる國民の心とは異り、熱帶國民の氣質と寒帶國民の氣質とは其の趣を一にせず、雨多き地、雨少き地、地震ある國、地震なき國、皆其の感情を同うせざるもの、其の一面にはこれら自然現象を一にせるもの、共通の心を有せるを示すものにあらずや。之れに加ふるに國家が同一統治を彼等に試みんか、彼等は其の利害關係を一にする上に於て、又其の統治の久しければ久しきだけ因襲性を爲して其の共通感情を助長し、地理的に其の國土を愛するの心は政治的に其の國家を想ふの心と結合して一旦事ある時には呼應して立つの共通性を造る。

國民性の徹底

我が國民性の徹底せるは、常に其の民族を同じうするのみならず、其の統治を同じうし、血統の中心は即ち政權の中心にして、義は則ち君臣にして情は父子たる美風を有する上に、金甌無缺の此の大和島根は建國以來、外侮を受けざる歴史を有し、二千六百有餘年の久しき共同生活は共通の思想、共通の感情を傳へ傳へて其の根本に於て奈何ともすべからざる特異性を有す。頼山陽、曾て岸岸狗の畫を力士某に與へて其の化粧廻しと爲さしむ。岸狗以て自己の畫を侮辱するものとし、山陽の書を得て、藝妓に與へ、之れを腰巻となさしめて報復する所あらんとし、人を介して書を山陽に囑す。山陽快諾、直に筆を執つて「天照皇太神」と書す。岸狗怒れども以て奈何ともする能はず。此の奈何ともする能はざる所に國民性の發露を

見るにあらずや。もとより我が民族として純粹なる大和民族のみにはあらず、早く姓氏録に皇別、神別、蕃別の別ありて蝦夷の血も熊襲の血も、南洋土民の血も、支那民族の血も混じたりと雖も、そは悉く山陽の「花にあくる春のみよしの見しならば、唐土人もこま人も、大和心になりぬべし」といへるが如く同化され終りしなり。

習俗

類を以て集るか、集つて類化せらるゝか、一國、一國の風あり、一郷、一郷の俗を存し、他の見て以て奇とすることも、平然として之れを行うて何の怪むなし。我が國民の頭を下げ腰を屈するを以て禮とするは、自ら異とせざるも、西藏人の兩手の拇指を突き出し舌を出すを以て禮とし、南洋土蕃の中には鼻と鼻とを突き合して禮とするものあるを聞かば、何人も失

笑を禁じ能はざるべし。習俗は所によりて變るのみならず、亦時によりて變化し、五十年前までは見て以て尋常となしたりしチョン鬚の今日は奇態に感ぜらるゝも亦此の類にあらずや。

模倣

人は模倣の動物なり、社會の心理は之れによりて結束せらる。言語も模倣、服装も模倣、右の手に箸を持ち左の手に茶碗を持つも亦模倣。吾等の生活の大部分は模倣に支配せらる。習慣といひ儀禮といふも過去の模倣。社會は模倣を強要し、同一色彩を以て之れを塗抹し去らんとす。されど唯だ模倣のみあつて毫も發明の之れを新にするなくんば、社會は萎靡し沈滞して終に死滅せざるを得ず。新奇を好む人心は、此の模倣の中より又新たな發明を要求し、其の發明せられたることの時好に投ぜんか、又之れを

模倣して平凡ならしむ。平凡なれば飽き、飽けば又新らしさを求め、求め得れば又之れに模倣す。まことタルドの教へたる如く模倣と發明とは社會推移の状態にして、發明は先覺の士となり、模倣は凡俗の衆に行はる。發明は即ち社會の個人化にして模倣は社會の個人化。世諺にいふ「初めて海鼠を食ひし男と、初めて白粉を塗りし女は頗る大膽なるものなりしならん」と。海中にある彼の醜動物、取つて之れを食ふは非常の膽勇ありしものならむ。しかも之れを食うて其の味の美なるや、甲傳へ乙倣ひ、終に何人も怪まざるに至り、初めて顔面に白粉を塗抹して衆人の前に出づ、頗る大膽の女ならざるべからず、しかも色の白きは七難隠す、其の美を見ては虚榮に富める女の忽ちに之れを模倣するあり、傳へ傳へて通常のこととなる。かくてはならじと、自中に紅を點ずる口紅を用ふるあれば、又模倣して奇とせざるに至る。世はかくて移り行き、一面に模倣を強要しつゝ、他面に

新らしさを求む。模倣せざれば時代に遅れ、模倣のみを事とせば進むに由なし。

無意義の喝采

辯士、壇上に豪語すれば聴衆悉く拍手す。試みに其の一々に就て拍手の理由を質せよ。彼れ悉く辯士の言に贊して然るにあらず、彼等は前後左右の人々に暗示せられ、何の意識もなく其の爲せるがまゝを模倣したるなり。人には此の暗示享受性あり、無意識的模倣あり。社會の色彩の同化せらるるもの多く之れに由る。

時好に投ず

初めは便なりとして模倣したるもの、馴れては其の尙ほ足らざるある

を思ひ、初めは美^びなしとして襲^{しよ}用^りしたりしことも、漸^{ぜん}次^じに其の缺^{けつ}點^{てん}を見出^ししては、完^{くわん}備^びを求^{もと}むる人心の更^{さら}に之れ以上のものを望^{のぞ}み、望^{のぞ}み通りては翕^あ然^{ぜん}として一世を風靡^{ふうひ}するの流行^{りゅうこう}品^{ひん}となり、模倣^{もぼう}し盡^{つく}くさるゝも尙^{なほ}ほ飽^あくな^きき慾^{よく}求^{もと}の、不備^{ふび}なる點^{てん}を認^かめては、或^{ある}は前^{まへ}きに行^いはれしものゝ回^{くわい}顧^ごとなりて此に反^{はん}動^{どう}の勢^{せい}ひを示^しし、又^{また}それに優^まれるものゝ出^いてゝは、忽^{しん}ちに新^{しん}に就^つく。流れ行く水の如^{ごと}き世の人の心、大波^{たいは}小波^{せうは}の寄^よせては返^{かへ}す如^{ごと}き人心の移^{うつ}動^{どう}は、大なる勢^{せい}力^{りき}となつて其中^{なかつ}に漂^{たふ}へる個人^{こじん}を席^{せき}卷^{くわん}し去^さる。能^{よく}く此の氣^き運^{うん}を察^{さつ}して以^{もつ}て時^じ好^{こう}に投^{とう}ずべく、時^じ好^{こう}に投^{とう}じて以^{もつ}て流行^{りゅうこう}の源^{げん}泉^{せん}を造^{つく}るべし。

流行の傳播

流行^{りゅうこう}の源^{げん}頭^{とう}は個人^{こじん}若^{わか}くは二三の人に發^{はつ}して、初^{はつ}めは少^{せう}數^{すう}者^{しや}の意^い識^{しき}的^{てき}模^も倣^{ぼう}となり、終^{つひ}には傳^{てん}播^ぱして多^た數^{すう}の無^む意^い識^{しき}的^{てき}模^も倣^{ぼう}となりて時^じ代^{だい}の好^{かう}尙^{しやう}を支^し配^{はい}す。

而^{しか}して其の傳^{てん}播^ぱの徑^{けい}路^ろは水^{みづ}の低^ひきに就^つくが如^{ごと}く、上^{かみ}の好^{この}む所^{ところ}、下^{した}之^のれより甚^ししきはなし。上^{かみ}より傳^{てん}はりて下^{した}に及^{およ}び、都^と會^{かい}より出^いでて地^ち方^{ほう}に流^{なが}れ、文^{ぶん}明^{めい}より發^{はつ}して野^や蠻^{ばん}に行く。時^じに下^か層^{そう}の風^{ふう}習^{じゆ}の上^{かみ}流^{りゅう}に及^{およ}び、地^ち方^{ほう}の好^{かう}尙^{しやう}の都^と會^{かい}を支^し配^{はい}し、野^や蠻^{ばん}國^{こく}の慣^{くわん}行^{かう}の文^{ぶん}明^{めい}に傳^{てん}染^{せん}することあらざるも、こは推^{すい}移^いの原^{げん}則^{そく}にあらざして、社^{しゃ}會^{かい}の變^{へん}調^{てう}に萌^もせる流^{りゅう}行^{かう}の墮^だ落^{らく}なり。彼^かの諷^{ふう}刺^しに妙^{めう}を得^えたる綠^{りよく}雨^うの江^え戶^ど趣^{しゆ}味^みの蹂^{じゆ}躪^{りん}せらるゝを慨^{がい}きて「されば流^{りゅう}行^{かう}の恐^{おそ}ろしきこと^{こと}は、これにつれて昔^こ乞^き食^{じき}の唄^{うた}なりしものをも、今^{いま}は玉^{たま}簾^{だん}の内^{うち}やゆかしき高^{たか}樓^{ろう}にて憚^{はや}りなく唄^{うた}ふなり」といへるは流^{りゅう}行^{かう}の健^{けん}全^{ぜん}なる徑^{けい}路^ろにはあらず。

上の眞似

人^{ひと}皆^{みな}向^{かう}上^{じやう}の心^{こころ}あり。我^{われ}れより勝^{すぐ}れたるもの、優^まれるものに倣^{なら}はんとす。此^{こゝ}に於^おて上^{かみ}に立^たつものは滿^{まん}目^{めく}注^{ちゆ}視^しの焦^{せう}點^{てん}となつて、其^{その}の好^{かう}尙^{しやう}は下^{かみ}移^いして一

般に普及し、権力あるものゝ行動は範を権力なき階級に垂れ、成功せるものゝ徑路は成功せざる多くの人々の辿らんとする所となり、一物時好に投ずれば模擬百出し、一事世の稱賛を受ければ萬人之れを學ぶ。弊は之れに伴ふべし。しかも之れ惡事にあらず、世はかくて進み行くなり。

上る時は下る

世の推移には動あり反動あり。反動によつて新たに動き、動くによつて復た反動を生ず。しかも其の新たに動くものは先の動と同じからず、之れより来る反動も亦前と異り、彼のヘーゲルのいへる如き正反合の三段的發展となり、正より反、反より合、合より正、正より又反、かくて正反の合となりて又正より反、反より合となり、かくて究竟の目的とする完全に進み行く。動中静あり、静中動あり。大なる波、小なる波。大なるものには

大なる去來あり、小なるものには小なる生滅あり。世に風猿の詞なるものあり。

登れく、のぼる時はくだる、くだれく、くだる時は上る。

すがりゐる竿に手足も括られて

おのれ動くと思ふ猿かな

上る時は下り、下る時は上る。一起一伏は浮世の波。正あり反あるは社會の徑路。能く此の氣運を看取するものにて先覺の士と名くべきか。しかも此の動靜、起伏、生滅、去來、其の正といひ反といふも皆是れ宇宙大意識の顯現、おのれ動くと思ふは大なる誤りなり。

社會の四季

年齢の個人の心に影響するは争ふべからず、希望に満てる青年の心と追

懐の情轉た切なる老人の心とは同じからず。青年は春の如く、壯年は夏の如く、中年は秋の如く、老人は冬にも似たり。これ唯だ個人の上のみならず、社會も亦此の如し。希臘の文明の花の如くに美を呈せしは歐洲文明の春にも喩へつべく、羅馬帝國の武威八紘に振ひたるを夏に比すべくんば、西羅馬帝國滅亡後の歐洲は秋風蕭殺として終に滿目荒涼たる冬景色にも似たる暗黒時代となり、かくて一陽來復して宗教改革となり、文藝復興となりて近代文明の曙光は此の間より洩れぬとは先輩の既にいふ所。これを我が國に見るも、七重八重咲く花の匂ふが如く今盛りなりける奈良朝より大宮人は櫻かざして今日も暮しつる平安朝は、實に日本文明の春なりし。藤原氏の榮華の夢覺めて平家一たび權を得しも、そは東の間にて南海の春吹く風と共に散り行きて、鎌倉山の星月夜、柳營、兵馬の權を收めしより、相模太郎、膽斗の如く蒙古の大軍を叱咤し了りしは炎帝威を弄する夏にも比

すべきか、南北朝を経て足利の代となり干戈隙なく、野も山も枯れ果てしは秋の景色にも似たらずや。徳川氏の國を鎖して三百年の太平を致せしは冬籠の時代とも見らるべし。冬深うして青春の機漸く動き、皚々たる雪の下に萌え出づる野邊の草の乾坤一轉して明治の世となりしは、二たび花咲く春となりしにあらずや。時代々々の思想は之れを證し、其の時々の社會状態は之れを示す。

社會の理想

完全を求めつゝ、進み行く人の世は、吾等の生活を層一層幸福ならしめんとて、過去幾千年、吾等の祖先は努力して吾等が生活を壓迫する所の自然を克服し、科學の進歩、機械の發明となりて幾多の利便を現代に遺し、共同生活の圓滿を計らんとて道義の唱道となり、法律の制定となつて刻一刻、社

會の機關は整備せられ、世界の人道を開展せらる。今の昔と異なるもの皆去にし人々の心の表現、先人努力の結果なり。所謂文明の發達なるもの亦之れに外ならず。文明の定義や多端、或は自然の物質及び勢力の利用とし、或は道徳的生活の發展なりといふも、要は彼のマッケンジーが人間の幸福として算せし自然の克服、社會機關の整備、個人人格の開展を目的とするにあるは何人も否む能はず、されど未だ完全に此の幸福の實現せられたるにあらざれば、求めて止まざる向上の心に策ちて其の實現を計ること、吾等が理想の開顯にして移り行く社會心意の目標なれ。吾等は眞善美を求む、而して社會心意も之れにあてがふ。これ豈に宇宙の大意識より進み出てたる人類の使命にあらずや。

相變る

變遷によつて進歩する世に「相變らず」の一語を以て目出度事の極としたる徳川三百年は秩序を維持するに於ては功ありしとはいへ、大勢に反したる此の標語は社會をして沈滞せしめ相變り行くべき世をして不振に陥らしめしは事實なり。之れが反動として起りし維新の初は開化の語を眞向に振り翳し「開けない」の一語に無限の侮蔑を含ませ刷新の大業は成りぬ。進みては退くを忘るゝ人の心は、此の語の何れにも利弊は伴ひしとは云へ、變り行く世を「相變らず」に止めんと夢みたるは大なる失敗たるを免れず。

成語の力

群衆の心は結晶して一個の成語となり、之れに多大の力を附與して偶像の如き權威を附與す。勤王攘夷の一語は倒幕を助長し、自由民権の聲は國會開設の氣運を促し、憲政擁護の名の下には群衆雲の如くに集る。成語の

人を動かすや頗る大。ルボンいふ、政治家の第一要義は群衆の舊來の名稱の儘にて最早忍ぶこと能はざる事物を装ふに評判よき言語、若くは少くとも悪感を挑發することなき言語を以てするにありと。成語轉換の秘訣を知るものは以て能く群衆を統御すべきか。群衆は感激性に富む。苟くも其の成語にして彼等の嗜好に投ぜんか、驀然として之れに進む。進むこと速なるが故に倦むことも亦早く、小蹉跎に絶望し、小失敗に落膽す。此の時に當りて更に新たな成語を拉し來つて之れを奨すあらんか、彼等は復た猛乎として起つ。所詮群衆の理解力は簡單にして明瞭なるものを求むれば之れを動かすの思想も亦絶對的且つ非讓歩的にして其の排他的なるに於て功を奏する多し。如何に高尚なりとも難解なるものは彼等の心に響かず、如何に妥當なりとも、趣味に合せざるものには之れに遠ざからんとす、通俗卑近は群衆の心を得るの一要件、陽春白雪和するもの少なく、鄙歌却て傳播

の速なるものあるも皆之れに由る。群衆の指導も亦難い哉。

群衆の共通精神

特殊状態に於ける人と人との集團は、此に集合の心意なるものを生じて各個人の特異性は没却せられて一致せる一個の共通精神となる。已にこれ共通精神なり、此の故に各個人の意識的個性は潛みて各個人の類似共通する無意識的部分勢ひを得るが故に、理性は影を隠して感情のみ昂り、思慮を缺き、責任の念を失ひ、暗示を感受すること速にして、動かされ易く、變じ易く、信じ易く、怒り易し。故に欺かれ易しと雖も、一たび其の虚偽なるを看破せんか、反抗の情も亦甚しく、激しては利害を忘れ、感じては身をも抛つ。然れども、もと個性を没却するが故に、自ら動くことは稀にして、多く之れを動かすの指導者を待つ。指導者一點火を施して群衆の心

は爆然として發す。一揆暴動多く此の心的状態に成る。

暴動の鎮撫

群衆は指導者を力とし、統率者を頼みとし、終に偶像の如くに之を崇拜するに至る。故に其の指導者にして倒れ、其の統率者にして假面の剝る、あらんか、群衆の心は之れより離れ、潛みたる個々の意識は頭を擡げて、其の集合心意は終に解散を餘儀なくせらる。暴動の鎮撫は首謀者の物色にあれど、事の若し起るべくして起りしものならんか、第一の首謀者倒れても、更に第二第三の首謀者を出して手を變へ品を變へて其の目的を貫徹せざれば止まざれど、何の理由なき煽動に出でたるものは、煽動者の消失と共に、嵐の吹きし跡の如くに消え去る。しかも尙ほ囂々たるものあれば情力のみ顧みるに足らざれども、焼け木杭の復た野心家の點火を受け易けれ

ば、群衆を群衆として理解せしめず、これを個々に引き離して説得し見よ。集つては鈍き理解力も、個々の心は能く之れを領會す。これ亦暴動鎮撫の一法なり。

非理法權天

古來楠正成の旗印として「非理法權天」の五文字を傳ふ。語の出處は之れを審にする能はざるも、其の意は取つて以て社會の心意を説明するに足る。如何に粉飾を巧みにするとも非は理に勝たず、偽は眞に破れざるを得ず。盲動に流れ易き群衆の、時に野心家の煽動に動かさるゝとも、時過ぎては反省の機の内熟せざるを得ず。よし妙辯巧辭を以て糊塗するものありとも、假面は終に剝がれ、眞相は終に暴露せらる。誇張せられたる廣告の能く世人を眩惑するありとも、實質の之れに伴はざらんか、後には嘲笑

の料となる。欺かるゝは一時、動かさるゝは瞬間。非は理に勝たず。然れども理も亦法に勝たず。法は最も完全なる社會結合たる國家の規制にして共同生活の保證、其の社會に公布せられたる以上は知と不知とに關せず、當該社會を羈絆するの力を有す、大石良雄の擧、如何に義なりとも國法は之れを非するを忘れず、佐倉宗吾の行動、如何に己むを得ざるに出づるとも、法は之れを寛假する能はず。其の改廢は別個の手續に屬し、其の行はるゝ間は社會は執行の權を抛たず。然れども其の法の行はるゝは同一主權者の下に立つ國家社會の内にして、其の以外のものに及ばず、國と國との間にも亦國際法規の如きものゝ定められて、相互に之れを規制すると雖も、權力の前には行ふ能はず、國內の法も最大なる權力によつては時に蹂躪せらるゝを免れざる時代ありき。此に於て法も亦權に勝たず。されど此の權も天には勝つ能はず。天とは宇宙大意識の命令を遵守する人心秘奥の靈機

と脈絡貫通する自然の大法。之れに反しては如何なる法も改められざるを得ず、之れに抗しては如何なる權力者も倒れざるを得ず。法に枉げられ權に服せらるゝとも、眞理の最後の勝利者たるは能く之れに順適するに由る。時に汚隆あり、世に盛衰ありとも、そは一時的の現象にして、永久的なる理想の追求は終に眞なるもの善なるもの美なるものをして勝たしめずんばあらず。非は理に勝たず、理も時に法に勝たず、法も時に權に勝たざることありとも、天は終に永久の勝利者たるの意に解して、此の五文字も亦多大の教訓を含めるを念ふ。

戰爭論

圓滿を望み、平和を愛し、道德的に開展せんとする社會、何が故に戰爭なるものあるか。予少しく説あり、請ふ試に之れを論ぜん。

干戈を動かさずして太平を致す。これ人類の理想なりと雖も、其の實現までには尙ほ多くの時日を要す。吾等が今日文明の徳澤に浴し、生命、財産の安固を保障せられて生活し得る所以のものは、吾等が國家なる社會團體を形成し、其の權力によつて危害を豫防し、犯すものを制裁するあるが故に外ならず。若し此の組織が猛烈なる弱肉強食を制止するなく、人類をして無制限なる自由競争に放任するあらんか、吾等が生命財産は一日も安さことなく、強者は弱者を屠り、其の又強者も亦最強者の爲に蹂躪せらる。世は全くの修羅場たるべきに、人類必然の要求は、相團結して國家なるもの、萌芽を生じ、其の初めは弱者は強者の保護の下に安全を計り、其の安否悉く強者の意のまゝなりしが、かくては其の安否の覺束なく、終に比較的變化なき法律なるものによつて規定することとなり、其の法律も亦初めは二三權力あるもの、自由によつて定められしが、漸く進みては國

民全體の意志によることとなりて現代の立憲的國家を成すに至りぬ。此に於て國民は自繩自縛、自己の協賛したりし法律によつて自己の行爲を束縛せられ、此の束縛によつて生命財産並に權利の安全を保障せらるゝに至り、苟も法を枉げ律に背くものあらんか、國家は之れに下すに刑罰を以てして社會を修羅場より脱離せしめ、以て干戈を動かさずして太平の徳澤に浴せしむ。しかも渾圓球上、國を立つるもの一にあらず、東西南北、各々過去の歴史と現在の領土とによりて其の團結を鞏固にし、各自法を立て律を制して其の統治の範圍を守り、甲の國は乙の國と接し、乙の國は又丙の國に鄰る。其の利害の相渉らざるに於ては、將軍塞外、囂塵を絶ちて暫く平和を守り得べきも一たび利害の衝突し、感情の行違ふ所あらんか、甲は乙を除かんとし、乙は丙を併せんとし、此に國と國との争鬪を生ず。國內の禍害は法律の威力之れを除くべきも、其の統治權の到らざる他の國家の我

れに及ぼす禍害に至つては、法律を以て威を振ふに足らず。勢ひ干戈を動かして勝敗を兵刃の力に決し、鐵火相見えて邪正を鮮血の中に定めざるを得ず、殊に各國其の國情を異にし、休戚を同じうせず、道德標準を別にし利害を共にせざるに於ては之れ以外に解決を求むるの方途あるなし。世進み人さかしくなりては、かゝることの人道と相背反するを思ひて成るべく事を平和の中に決せんとし國際法の規定となり、仲裁裁判の制となるも、此の法は力の優れるものには應用し得べからず、此の制も服せざるものに對しては兵火の外なきを以て、各國悉く同一主權者の下に隸屬して何の不服なき社會を現出するか、各國の權力皆均一せられて國に大小なく兵に強弱なき世の現れざる限り、戰爭は人類社會より其の跡を絶つる期なかるべし。しかも此の如きは人類本來の性情に反し、社會進歩の道程に悖る。人類に慾望あり、進歩は競爭の裡より産出せらるゝ以上、戰爭なき平和は

望むべくもあらず。高山樗牛會て豪語していふ、「戰爭は一種の競爭のみ、唯競爭の器械として學術が智識を用ひ、商業が財貨を用ふる代りに、戰爭は人命を用ふるのみ。(中略)吾等は戰爭と名くる一種の競爭にのみ特別の罪惡ありと思惟するを欲せず」と。人を殺すを禁止せる國家は、之れを犯すものに對して死刑を施して憚らず、他の自由を蹂躪するを禁止せる法律は、之れに背けるものゝ自由を奪ふ。刑罰を以て罪惡と目すべからずんば戰爭も亦必ずしも、しか云ふ能はざるか。呂氏春秋に曰く、「家に嚴父の怒咎なくんば賢子嬰兒忽ち驕肆、國に刑罰なくんば百姓人民たるところに不逞、天下誅伐なくんば諸侯牧伯俄かに暴戾。故に怒咎は家に偃すべからず、刑罰は國に偃すべからず、誅伐は天下に偃すべからず」と。武は止戈の義なり、干戈を止むるが爲に干戈を動かす。望む所は平和にあるも之れを現出するが爲に戰爭の餘儀なきあり。戰爭は餘儀なきものにして好まし

きものにあらず。好まじきものにあらずと雖も、之れあつて以て平和を現出し得べしとせば、缺陷世界たる人生の已むなき現象と觀念せざるを得ず。然り、已むなき現象なりと觀念せざるを得ずと雖も、そは之れによつて平和を贏ち得る場合に於てのみ、しか云はるゝにして戦争の爲の戦争、私慾の爲の戦争に對しては、之れ殺人の爲の殺人、掠奪の爲の虐殺にして斷じて社會の進歩發展と相容れざるもの、戦争論は又終に道德論たらざるを得ず。

世は進みつゝあり。何事に對しても其の禍害を除き利便を増長せしめんとする人智の發達と、罪惡を消除し善美を顯現せんとする理想の顯現は、此の戦争に於ても幾多の變遷を見たり。昔の攻略は全く帝王の野心より出でたるものなりき。彼の歴山大王が父王の霸業を見て、かくては朕の征服すべき土地なきに至らんとて泣然として涙下りしといふは、昔の帝王の心

情より進り出てたる感慨にして、其の反面には彼れの偉圖も、其の基く所は世界を征服して其の威に誇らんとする野心に外ならざりしを語るの好適例にあらずや。此處に野心に出てたる攻略あれば、彼處に私情に出てたる復讐あり。萬民は唯だ其の犠牲となつて鮮血を流すに過ぎざりし。偶ま其の然らざるものもあるも、そは異宗教異民族に對する憎惡の感情によるものにして、もとより宇内の平和などいふ理想の含まるゝにはあらず。今の戦争は帝王戦争にあらずして國民戦争なり。國民は唯だ帝王の願使の下に盲従するにあらずして、各自其の動兵の理由を理解して戦ふこととなり。既に動兵の理由を理解するを要す、戦ひ必らず名なかるべからず。而して其の名とする所のものは平和にあり。平和を名とするにあらざれば以て民心を收攬すべからず。以て列國の同情を買ひ得べからず。列國皆之れを非とす、我獨り戦はんとす、之れ天下を敵とするもの、其の成敗利鈍逆め

目睹すべし。故に巧みに外交政略を利用し、且つ名を正しくして道義的に其の理由を示さんとす。これ又人心の自からなる要求を示すにあらずや。しかも外交の事多く利害の打算による。若し此の利害の打算より云へば、世に戦争ほど不経済不利益なるはなし。大砲を一發すれば少くとも數千圓の金を費消し、一隻の軍艦を轟沈すれば幾千萬の金は空しく海底に沈む。今回の如き大戦争をして、若し一年繼續するとせば、當該戦國は各自一年四十億乃至五十億の金を費消せざるべからずと算定せられ、此の上に國內の生産力を奪ひ、商業を杜絶し、且つ金錢を以て算定し得ざる人命を犠牲に供す。利害に明かなる文明人の長く忍ぶべきことにあらず。平和の唱道の多く資本家の口によつて唱道せられ、戦争の阻止が經濟家の上に計畫せらるゝは、此の戦争の將來をして鮮血より脱却せしめむとする氣運なりと見るも亦不當にあらず。一面より微弱なりとも、道義、人道の聲の人を動

かせる、少しく考慮を運らすもの、鮮血を神聖視する人道、殺戮を歡迎するの道義の存すべくもあらざるは、見易きの道理なれば、彼のトルストイの極端なる無抵抗主義は人生の事情と相容れずとするも平和の手段を以て列國の紛議を解決せんとする傾向は必然に生じ來つて、終に彼のルボンが云へる如く「歲月の力は此の戦争をして全く跡を絶ち、否、全く其の形態を變化せしめ、平和的事業の競争たるに至る」やも知るべからずと雖も、よし、此の如きを暫く遠き將來に置くも、人類が平和を愛好するの情は著著其の慘禍を縮少し其の範圍を制限せんとし、曾ては國家と國人とを分たず。すべて之れを敵としたるものが今は戦鬪力なきものに對しても之れを度外視するに至りし如き、敵としては其の戦鬪力を奪ひ、一たび之れを奪へば個人として博愛仁慈の精神を以て接す。此の戦争の文明化せられ道義化せられしは、やがて殺傷以外に解決を求めんとする徑路なりとも見るべ

からざらんや。されど、これ戦争に於ける形態の變化のみ。之を以て戦争の全く絶滅せらるゝを期すべからず。斷訟の官衙に艸離々たりとも法は廢すべからず、司獄の壇場に埃塵山を爲すとも刑は止むべからず、世如何に平かなりとも、武装は解くべからず。明教大師いふ「兵は刑なり。仁に發して義を主とす。仁を以て亂を憫れみ、義を以て異を止む。暴を止むるが故に、相正して相亂れず、亂を憫れむが故に、生を圖りて殺を圖らず。是の故に義征舉りて天下懷かずといふことなく、正刑行はれて天下順はずといふことなし」と。これ戦争の理想なり。此の理想に順適するものを義戰とし、之れに背くものを暴戰とす。古の帝王戦争は多く領土侵略の上に出でたる暴戰なりし。今の國民戦争は多く自己存立の必要に迫られたるものにして義あり暴あり。自己發展の爲に妄りに兵を動かして他を侵犯せんとするものは暴なり。既に此の暴ありて平和を擾亂す、これを伐つて干戈を

止めしめんとするものは義なり。戦争必ずしも罪惡ならず、要は其の義と暴とを判つべし。義によつて立つ、膺懲に慘あり、誅伐に禍ありとも、山雨一過して山更らに青きが如く、平和此の爲に克復せられ、人道此の爲に發展せんか、吾等は缺陷世界なる人生の常弊として暫く此の戦争の慘禍を寛容せんのみ。

戦争と人心

戦争は當該社會の利害休戚に關するが故に其の結果頗る固く、従つて其の共通感情は頗る鋭敏にして一勝一敗ある毎に相共に喜び相共に悲み、喜ぶ時は九天の上に見るが如く、悲む時は九地の下に沈むが如く、感情の變動頗る激甚にして、意氣の興奮しては殆ど敵國を呑むの感あるも、意氣の沮喪しては國も家も亡び行くが如く感ず。氣は力なり、沮喪しては進む

能はず、興奮しては堅壘も妨ぐる能はず。理性影を潜めて徒らに感情の昂り、慈仁の風漸く姿を隠して残忍の野性勢ひを逞しうするは戦時の常、しかも尚ほ其の間に名の美なるものを求めんとする所に潜める心の力を認む。徳川家康の戦ひ破れて三河の大樹寺に入るや、登壇上人、徐ろに問うていふ、

「御若年より數度の戦ひ、敵を打ち亡ぼして何の爲にかしたまふ。」
家康答へて、

「武威を盛にして敵を打ち、終には城を乗り取るときは、其の領地即ち歸服す、これ小なる勝なり。大度の武將は其の計略大にして爲す所も亦然り、然して勝つときは大國の主となりて、富、四海にわたり、威、世上に振ふ。」

上人莞爾として、

「富四海に互り、威を世上に振ひて何の爲にかしたまふ。」
と云へば、家康

「然る時は其の家を興し父母の名を輝かし、其の身は名を後代に止め、榮華を子孫に傳ふ、これ武功の大なるにあらずや。」

上人、重ねて

「それ人身に貯ふる徳を以て萬人を司りてこそ、其の榮も久しからめ、勇力強盛を振うて人に勝つ時は、其の利を保つこと久しからずして人に亡ぼさる。されば幸ひに天より受くるを第一とす。天より受けざるに己が計力にて討ち從へしは幾程ならずして衰ふ。これ非常の武力にして却賊のことに候……天下を我が物とし榮華を極めんために庶民を貪り苦むるものゝ久しき理なし。太守何ぞ天下を平かにして百姓塗炭の苦を救はんために戦ひたまはざる。」

と。家康の心機一轉したるものありと傳ふ。

戦争

人類の歴史は戦争の歴史。往古來今、矢たけびの聲耳に絶えず、旌旗風に翻らぬ日とてはなし。偶ま小康を得るも亦是れ一種の休戦状態。陣容備はりては旗鼓相見え、糧食足りては兵火相接す。魚鱗鶴翼山河を彩り、虎嘯龍蟠天地を震動す。嗚呼人の世は惡魔に魅せられ、人の心は殺氣に捕はるゝか。血の洗禮は平和の假相を剝奪し、刃の福音は文明を粉飾す。蘇東坡いふ、「兵を好むは猶ほ色を好むが如きなり。生を傷ふこと一にあらざ、而して色を好むものは必ず死す。民を賊すること一にあらざ、而して兵を好むものは必ず亡ぶ。此れ理の必然なるものなり。夫れ惟だ聖人の兵、皆已むを得ざるに出づ、故に其の勝つや安全の福を享け、其の勝たざるや意外の患なし」と。人生の戰場此の如くにして漸く禍なきを得んか。

秋風今夜征旅を想ふ。行雁誰が爲にか郷信を傳へん。(大正三年十月)

天地の心

天地の智識

天とは何ぞや、地とは何ぞや、人の目は能く天を望むべきも見る所に限りあり。人の足は地を離れざるも踏む所に限あり。有限の觀察、有限の實驗を基礎として天地を知らんとす。其の悉くさぐる所あるもとより疑ふべからず。昔人の見て以て天とする所は僅に彼が頭上を覆ひたる霄漢にして、其の地とする所も亦僅に彼の知り得る限りのみ。然れども人智漸く進みて天空の大は想像せられ、社會次第に發達して我が棲む以外の土地との交通開かれ、曾て推定したりし外に多くの地あるを知りしも、其の感想は長く幼穉の域を脱せず、天よりも知り易き地に於ても山河の隔離、海洋の區劃

は、西の者は東を知らず、東のものは西を知らず。這般學術の先進を以て誇る歐洲に於ても、中古にあつては亞細亞の東北部は殆ど魑魅の棲む國の如くに考察せられ、阿弗利加の南部は地の端と想像せられ、南北亞米利加の如き大陸の存在は夢想だもすることなかりき。地球の全部が吾等の前に展開せられ、五大洲の明白に知悉せられたるは最近の事に屬し、兩極地方は探檢尙ほ未だ到らざるものありとはいへ、地の概念は明かとなりしも、天に至りては實際調査の困難なるが爲に久しく想像の虜となりて印度に須彌山の説ありて地を説明し、此の地上のもの並に初級の天を以て欲界とし、これに六、其の上を色界として十八、更に其の上に無色界に屬するもの九天あり、合せて三十三天を分類し、支那には九重の天として、太陰天、辰星天、太白天、太陽天、熒惑天、歲星天、鎮星天、恆星天、宗動天の説あり。其の最高を以て地を距る六億四千七百三十三萬八千六百九十里を算す。悉

くこれ推定のみ。近代科學の進歩は神の人類の爲に特に創造せられたりと信ぜられし此の地球も亦天體の一遊星として太陽に從屬するものたるに過ぎず。天界の王としたる太陽も亦獨り其の權を擅にする能はずして自ら八大遊星並に多くの小遊星に圍繞せられつゝ、茫々たる天空の僅に一隅を占むるに過ぎずして、天界には太陽と權を等しくする無數の恆星を有し、肉眼にても六七千を算すべく、直徑一インチ半の對物レンズを有する望遠鏡にても十萬以上を見るべく、其の鏡の精にして大なるに従ひ一億以上を算すべしといふ。かくて終に無限の感は此の空間の上に明かとなり、此に於て古代の天空を有限なる星界とする思想を排して宇宙の空間的に無限なることを示せり。

無始無終

天神、綸を垂れて海底の土を釣り、綸切れて海上に散布せりとしたる南洋の天地開闢談や、魔物イミルの斃れて肉は平野となり骨は山岳となり、頭腦は中央に彷徨して空となれりてムスカンデナピアの神話、混沌たる雞子の如く清きものは上りて天となり、濁れるものは下りて地となり、中に盤古氏を生じ、其の氣は風雲となり、其の聲は雷霆となり、兩眼は日月となり、四肢五體は四極五嶽となり、血液は江河となり、筋脈は地里、肌肉は田土となれりてふ傳説は、今信ずるものなく、久しく歐洲の思想界を支配せし神ありて六日にして天地を創造せりとの信仰も科學の前に力を失ひカント、ラプラス等の諸大家によつて星雲進化の説は發表せられ、其の宇宙の太初は混沌たる氣體の凝結にして我が太陽系の如きも其の初めは非常に熱せられたる星雲として存せしが、此の星雲は自己の重力作用によりて自轉を生じて球狀となり、漸次熱を放散して冷却收縮し、收縮すると共に

回轉の速度次第に増加し、遠心力の爲に赤道の部分膨脹して數重の瓦斯輪を生ずるに至り、此の輪の分離して各自團結して獨立體となりしもの、即ち今日の諸遊星にして、其の中央の主要なる部分は太陽にして我が地球の如きは其の初めは熾熱せる瓦斯體なりしも漸次液體となり、それに薄膜を生じ、遂に固體となりて現今の皮殻を生ずるに至りしものなれば、今にも其の内部には高温度の熱を有すと。さて此の地球は如何になるべきや。横山理學博士の「地球の過去及未來」にいふ「氣水の吸收によりて寥々たる一場の荒野と變ずるか、又は陸地の磨滅により海洋の氾濫を被るか、又は太陽の冷結により闇黒界となるか、又これに先ち太陽と衝突して其の燃料に供せらるゝか、此の四厄の中其の一は到底免る能はざる所なり」と。かくして而して後、如何になるべきか、科學は明確なる答辯を與へずと雖も、復び星雲の舊態を演じ、生じては滅し、滅しては生じ、終に窮極する所なか

るべし、天體には生滅あるべし、しかも時間は無始無終なり。無限の空間に互り無限の時間に通ず、これ吾等が宇宙に對する觀念なり。

哲學の一瞥

上下四方を宇といひ、往古來今を宙といふ。宇宙は時間的にも空間的にも無限なり、此の無限の宇宙を統一體として考察する所に哲學の歩武は進めらる。眼を開けば天地萬象我が前にあり、眼を閉れば無し。我あるが故に天地萬象あるか、天地萬象あるが故に我あるか。思惟する我、思惟せらるゝ萬象、此れは主觀にして彼れは客觀、主觀は心にして客觀は物。物と心とは天地萬象の二大別にして、宇宙の本質に關する考察は勢ひ二大思潮を生ず。二大思潮とは何ぞ、曰く唯心と唯物とこれなり。請ふ予が會て一瞥せる所を繰返して此の思潮の徑路を觀察せしめよ。

古來希臘哲學の潮流が専ら客觀的考察に流れ、デモクリタスに至りてはアトム(原子)を以て萬物の根本的成分として、この原子虚空を飛行し種々の運動をなし、結合して森羅萬象を爲すと説けるの趣は已に説きぬ。此デモクリタスは一般の心意の現象をも原子の運動によりて説明することを得べしと爲したるものなるも、プラトーンに至りては全然之れに反對し、生滅變化の現象界と常住不變の實體界とを區別し、此實體界をイデアと呼びて全く精神的のものとし、これのみ實有にして物體の如きは、現象界に屬する非實有のものとし、精神的なるイデアの顯現に過ぎずと爲しぬ。

かくて唯物唯心の二大思潮は相互に盛衰をなして近世に至り、デカルトに於て二元論(Dualism)は唱へられぬ。彼は精神と物質とを以て宇宙の本質とし、物質は廣延を屬性とする本體、精神は思考を屬性とする本體とし、此二は何等の共通點をも有せざるものとす。これ實に唯物、唯心各一元を以て宇宙の本質を説明せむとするものを調停したるが如き觀ありと雖も、物質と精神とはデカルトがいへる如く、何等共通の點を有せざるものにあらず、之れを吾人に見るも肉體と精神との相影響するは否定すべからざるの事實なり、少年の肉體には少年の精神あり、老人の肉體には老人の精神あり、肉體の病氣は精神に影響し、精神の病氣は肉體に影響す。然らば此二は二にして二に非ず、相互共通のものたるや疑ふを要せず。此に於て二元論は終に破れて又一元論(Monism)に歸せざるを得ず。スピノザは之に次いで出て精神と

物質との兩者を以て其根本は同一なりとし、同一圓形の外より見れば凸形となり、内より見れば凹形となる如く、主觀的に精神といふも、客觀的に物質といふも、終に二物にあらずと爲し、宇宙の本體は自存にして、唯一、自由にして永恆なるものとし、これを神といひぬ。哲學家エルドマンはスピノザの意を取り、其神と萬物との關係を説いて、

神と萬物との關係は水と波との如し、萬物は水に於ける波の如く心の方面に於ても物の方面に於ても種々雑多の相を現し變化して止むときなし、

と。かくて一旦スピノザに於て綜合せられたる哲學は、又自から二個の傾向を生じ、物心兩面の普く平行することは疑ふ可らずとするも、此兩面中物質に重きを置くか精神に重きを置くかの問題に就て、こゝにも亦唯物論と唯心論を生じぬ。これより先きホッブスなるものあり、盛に唯物論を唱ふ、曰く宇宙萬象は悉く物體及び其運動に外ならずして、心的現象中究竟して物體の運動に過ぎずといひ、一切の問題を機械的に説明せむとし、科學者は皆此唯物論に傾き、終に科學界の大偉人ニュートンを出すに至り爾來科學界は駁々として進み十八世紀に至つてはフオグト、モレシヨットビユフチル等の徒出で、盛に唯物論を唱へ、其勢ひ侮る可らざるに至りぬ。一面に於てはライブニッツはスピノザの思想を唯心的に發展し、物心二界は同等に宇宙の本質たるべきものに非ずして、萬有の要素たるべきものは精神的の單モナード(Monade)となし、下てバークレーに至つては物體は知覺を離れて存在する能はずとして純

然たる唯心論を唱へ、近世哲學の泰斗カントは兩極端を調和し、皮相なる唯物論を却くと共に淺薄なる唯心論を排斥し、こゝに批評哲學の根據を置きたりと雖も、其全體の調子より云へば唯心論的なることは疑ふを要せず。彼は經驗し得らるる現象界と經驗の及ばざる實體界とを區別し、現象の奥に横はれる一境即ち物自體(Thing in itself)に就ては何等の知る所なしと爲したるも、其現象界を以て主觀を離れて存在する物自身にあらずして、吾人の主觀に映じたる相に過ぎずといひて精神的實在に重きを置き、唯だ吾人をして斯る自然界の表象を起さしむる何者か主觀を離れて存在することは承認せざるべからずといひ、此何者かを物自體とし眞實體とするも、其人性を説くに當りて、人は一分は現象に過ぎざるも一分は物自體なり、此物自體なる所、道徳上の責任性の存する所となせる如きは、明かに唯心的傾向を示すものなり。カント以後の哲學も亦皆此唯心的傾向を帯び、フイヒテは萬有の根元は我が活動にありと云ひ、我と非我とを對せしむるもの亦これ我が活動に外ならずとし、シエーリングは我を以て非我より生じたるものとし、

我即ち精神界は非我即ち自然界物質より咲き出でたる花の如きものにして、此の花こそ自然界の眞性質を示すものなれ。

といひ、ヘーゲルは絶對的理想理性を以て宇宙の實在とし、此理性出で自然界となり、内自ら意識して精神界となる。一切の事物は皆この絶對的理想の發現に外ならず、山川草木禽

獸蟲魚みな此理性の意味を語るに外ならずとし、シヨツベンハウエルは意志を以て宇宙の根本的實在とし、天地萬物の動いて止まざるもの皆これ意志の發現なりと絶叫し、意志は盲目的にして唯だ無窮に求むることを知つて休むことを知らず、これ其本性なりといふ如く、其論據は諸種に分るゝといへども、要するに唯心的一元を以て宇宙の實在を説明せむと試みるに於ては即ち一なり、即ち近世哲學の傾向は、

- 一、宇宙の現象と本體とは別物にあらず、
 - 二、現象は本體の顯現なり、
 - 三、宇宙の本體は心的實在なり、
- として心的一元論に歸するの傾向を生じぬ。(拙著宇宙論)

好譬喩

宇宙萬象の活動は、時計の機械によつて整然として時を違へず其の針を動かすが如し。機械もと心なし、心なき物質たる機械と機械との組合せ能く此の秩序ある活動を爲す、此の以外他に心なるものあるにあらずと。又

いふ物質の結合の上に靈妙なる心的作用を現するは彼のいろは四十七文字の一字一字に何の妙味なきも、組合せて俳句とし和歌とすれば無限の興趣を傳ふるが如し。「古池や蛙飛び込む水の音」人其の幽玄を愛す、しかも之れを分解してふの字の字の一々に就て見よ、もと何の妙あるなし。物質結合の上に精神作用を生ずる猶此の如きかと、これ其の本質に於て唯物論を取り、其の活動に於て機械論を執するもの、主張なり。唯心論に據り目的論に立つものは反駁していふ、如何に時計は物質と物質、機械と機械との結合になるとても、雜然と物質を集め、ゴチャ／＼と機械を合せて何の時計が生ずべき、時計の如くに組み立てんてふ目的先づ立ちて、其の如くに組合せられたるにあらずや、いろは四十七字の中何の目的なく紛然と十七字を拈して俳句の妙生ずるの理なし、幽寂の心動いて此の句となる、心は本なり物は末なりと、これ好譬喩なり。然れども文字を離れて句なく、

機械を離れて時計なし。物といひ心といふは同一物の両面、物ある所に心あり、心ある所に物あり。既に宇宙なる物あり、天地なる機械ありとせば其の裏面に宇宙の目的あり、天地の心あるを知るべきにあらずや。

萬物心あり

萬物皆心ありてふ哲理は、先づ類推の理法によつて證明せらる。パウルゼンいふ、「吾等が自己以外に於て直接に知り得るものは物質現象のみ。吾等は自己と同様なる肉體の泣き笑ふを見、又其の聲を聴く、しかも其の悲喜の感情思想其物は決して直接之れを認め得るにあらず、唯だ自己より類推して、自己の感情思想の此の如き場合に悲喜するを以て彼れも亦然るべしとなすに外ならずして、即ち我れに心あり我と同じき彼れにも心ありと類推するの外なし。此の類推の範圍を擴めて一切の人類に及ぼし人皆心あ

りといひ、更に擴めて一切の動物に及ぼして空飛ぶ鳥、野を驅ける獸にも心ありと斷定す。而して其の植物並に礦物に及ぼさるものは、自己と趣を異にする點多きに由るべしと雖も、動物にまで及ぼしたる類推を何が故に植物に及ぼさるるか。植物には神経系統なきが故に心なしと云はんか、下等動物にも亦之れなきにあらずや。植物には自發的の運動なきが故に心なしと云はんか、植物は自ら其の枝葉を日光に向はしむることなきか、日光に對して花瓣を開き、夜に入りて閉づるものなきか。仔細に動植二物を視察するもの誰か此二者を全然異なるものとせむ。既に二者全く異なるものにあらずとせば、一に於て心ありと類推し得たるもの他に於て絶無なりと斷ずべきの理由なし。其の精神生活に繁簡の差はあれ、植物とても之れなきにあらず。已に動物植物の如き有機體に悉く之れありと類推し得べしとせば、更に之れを金石の如き無機物に應用し得ざるの理なし。これら有機物

は常に無機物を吸収して以て其の生命を持續し精神生活を顯現するものなれば、彼れにあつて此れに無しとは云ふべからず。試に一掬の米を地上に蒔かば數升の米となるべく、これを雌雄一對の鼠に與へんか、終に精神を有する無數の生物となるは吾等の日々に見得る所にあらずやと。ヘンリーワードイム、精神は砂の中に眠り、草木の中に夢み、動物の中に力を集め人に於て自覺すと。精疎の差はあるべきも物として心なきはなし。

六大周遍

萬物皆心あるの思想は、眞言密教の教理夙に之れを説明す。彼れは天地萬物を分ちて二とし其の物質的なるものには地、水、火、風、空の五大を立て一切の物には堅(地)濕(水)暖(火)動(風)無礙(空)の性を有せざるはなしと説くと共に、其の裏面には精神的なる識大(心)を具せざるなしとし、

其の精神的なる識大も亦地水等の五大を離れずといひて物心合一、色心不二の説を明かにし、此の六大は宇宙間に遍からざるなしとし、此の六大周遍の主體を人格化して毘盧遮那佛といふ。毘盧遮那は梵語遍一切處を意味し意譯して大日如來といふ。大日如來は宇宙の實在、山川國土草木禽獸皆其の顯現にあらざるはなし。天に一輪の月、影を萬機の器水に浮ぶるが如く、實在の光りは個々の現象の上に宿るをいふ所に此の教の妙旨存す。

一心二門三大

大乘起信論に於ては此の宇宙萬象の實體を一心と觀じ、これを如來藏心といふ。而して此の一心を本體と現象との二方面より説明して一を心眞如門と名け、他を心生滅門と呼ぶ。宇宙萬象何物として生滅去來せざるはなく、變化は萬有を通貫せる現象なれど、其の本體に於ては不生不滅のもの

あり、所謂波に生滅去來の相ありと雖も、水に不變の性あり、見來れば宇宙の現象は個々雜多にして變化し生滅すれども、其の本體は平等一如にして變化なく生滅なし。此に於て一心の體、相、用を以て宇宙を説明す、相即ち現象の上よりいへば萬物悉く差別にして天地間一も相同じきものなきも、其の體即ち本體の上よりいへば萬物悉く一體にして毫も異なるなし。相は異にして體は同、體は同じといへども、相異なるに従つて其の用も亦異なる。同じくこれ土、しかも相異つて土瓶となり茶碗となれば、土瓶には土瓶の用あり、茶碗には茶碗の用あり。これを天地の妙用とし、此の體相用は萬物の上に遍からざるなきが故に大といひ、一心二門三大の説を以て萬有を解釋す。請ふ、更に次に説く所の事例によつて領悟せんことを要す。

天下一品

宇宙大なりと雖も、乾坤廣しと雖も、何れの處に我の外に我あるか。宇宙雙日なく、乾坤唯だ一人。これ豈に我のみならんや。他も亦獨自獨立、相互相異つて同じからず。一葉頭上の露、露さまくの姿あり。霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりける満山の花も亦必ずしも相同じきにあらず。机上一個の瓶、汚れたりと雖も、此瓶以外に此瓶なし、亦これ天下の一品と稱し得べからざらんや。萬有何物か同時に同處に於て同一状態を以て存し得るものある。歴々たる萬象悉くこれ天下一品にあらざるなし。

萬物一體

相の上よりいへば萬物皆異なる。しかも體の上に於て何の異なる所かあるべき。机上一個の瓶と机に對するの人と其の異なる多しと雖も、仔細に檢し來れば瓶は土によつて成る、此の人抑も何によつて養はる。彼れは米によ

つて養はる、其の米何によつて生ずる、土はこれ米の母、米はこれ此の人の母、土を以て成るの瓶と其の本源に於て異なる所ありと云ひ得べきか。王陽明いふ、

日月星辰禽獸草木山川石土、人と原只一體なり。故に五穀禽獸の類は皆以て人を養ふべく、藥石の類は皆以て疾を療すべし。只此一氣を同うするが故に相通するのみ。

と。天地同根、萬物一體。誰か之れを否み得ん。

あるべきやうわ

體同じと雖も相異なる。此に於て萬物各々功あり用と處とを云ふべし。體同じきが故に凡て平等なりとするは玉石同架の弊に墮ち、相異なるが故に凡て同じ所なしといふものは差別の妄見に捕はる。異にして同、同にして異、

差別にして平等、平等にして差別。此の離れて離れざる所に宇宙の妙用あり。能く此の理法を看取して初めて應用自在なるを得べし。昔は北條泰時梅尾の明慧上人に問ふに治心の要を以てす。上人いふ、「阿留邊幾夜宇和」の七字を忘れずんば則ち可なりと。柳綠花紅、蛙鳴雀噪これ皆「あるべきやうわ」の顯現。鶴の足の長く鴨の脛の短き、春としなれば百花絢爛として開き、秋としなれば枯葉蕭瑟として風に散る、悉く「あるべきやうわ」にあらざるはなし。同じく人、しかも君臣、父子、夫婦、昆弟各々其の盡くすべきの道あるもの之れ「あるべきやうわ」にあらざるや。諸法は皆實相、木としては相同じきも柱は立ち、梁は横はる、これを逆施して家の建つべからざるもの之れ眼前に「あるべきやうわ」の教訓を示すものにあらずや。異を執ずる勿れ、同を樹つる勿れ、不即不離の處に中道の妙存す。

一心法界

大乘佛敎の極致を以て目せらるゝ華嚴宗に於ては此の宇宙の萬象を以て遍一切處なる人格的實在毘盧遮那如來の果相其の儘の顯現とし、此の法界を以て一切萬法迷悟染淨を包括せる一心と觀じ、此の心を以て總該萬有心と名け、四法界の觀察法を以て萬物相關の理を説く。宇宙萬象其の相を見れば個々差別にあらざるはなし、これを事法界觀といふ。しかも其の體を見れば平等の一理あるのみ、これを理法界觀といひ、其の現象其の儘に實在、差別其の儘に平等ある所を觀察して事理無礙と呼び、更に一步を進めて差別の事象が相互に不離の關係を以て融合せる點に立脚して事々無礙を説く。事々無礙は華嚴の特色、萬物相互微細の關係を道破して頗る妙を極め、其の個々の事象の統一せられ連絡せらるゝを見ては何人も此の宇宙を

以て渾然一如の靈體と見ざるべからざるに至る。理、遠く、旨、深し。次にいふ所の如きは一二皮相の例證のみ。

一個の Copp

福澤諭吉翁、曾て、人の華嚴を説くを聽き、自ら一例を示していふ、卓上一個の Copp 之れを右より左に動かしたりとも、大宇宙に何等の影響なしといふは、萬物相關の妙を知らざるもの、予をして云はしめばこれ直に大宇宙に影響するの大事件なり、何を以て斯かいふとならば、此の Copp の卓上にあるは地球に引力あるに由る、地球に若し引力なくんば天外に飛散するやも知るべからず、既に地球の引力に由るとせば、これを右より左に動かす、地球の引力に些少の影響なくんばあらず、既に地球の引力に影響ありとせば、地球と太陽とは相互に引力關係を以て立つが故に、勢ひ

微弱なりとも太陽の引力に影響せざる能はず、既に太陽の引力に影響すとせば太陽系の星と星との關係に皆此の引力關係なくんば土星水星木星金星等皆其の影響を受けざるなし。既に太陽系全體に影響するとせば太陽系と其の以外の恆星系との關係も亦此引力關係なれば、机上一個のコップ直に宇宙を動かすといひ得べきにあらずやと。華嚴の萬物相關を説く亦復た此の如し。

小、小にあらず

史家いふ、クレオパトラの鼻にして今五分低かりせば世界の歴史は今と大に異なるものありしならむと。クレオパトラは絶世の美人なり、羅馬の英雄之れに迷うて歴史に幾多の波瀾を生ず。しかも此の美人の鼻にして五分を減ぜんか、其の美何の所に存する。既に其美なし、誰か又之れに迷はん、

鼻頭五分の高低これ大かこれ小か、遠く例を外國に求むるまでもなし。「假名手本忠臣蔵」十二段の波瀾曲折、其の本、顔世御前の美貌に因すとせば、其の眼の五分七分下りてありたらんには、此の好脚本も拈出する能はざるべし。小、必らずしも小にあらず、直に全局に影響す。妙なる哉、宇宙、萬物の相關の微細に行はるゝこと、概ね此の如し。

一指世界を動かす

近く例を求めしめよ、歐洲の禍亂、世界の戦争、抑も何が故にか起れる。其の因もとより多しと雖も、最も近きものは埃太利の皇太子が塞爾維人の陰謀によつて暗殺せられたるに因るにあらずや。之れが故に埃塞先づ干戈を動かさんとし、獨逸起ち、露西亞應じ、佛蘭西戰を宣し、英吉利亦劍を抜き、而して日本も亦之れに参加し、其の他土耳其、黑山國、羅馬尼、希

臘等も亦砲火相接せんとし前古未だあらざる世界の動亂となる。しかも其の本は刺客の持てる短銃にかゝれる指の僅に屈折したるに外ならず。此の指曲がらずんば其の彈丸發せず、彈丸發せずんば、堯皇太子變に遭ふなく、皇太子變に遭はずんば此の兵亦起るなし。一指頭の屈折直に世界を動かす。小、斷じて小にあらず。

萬物相關

萬物は微細に關係し、因果相連り、一の因を推せば萬有皆之れに與力し、一の果を質せば宇宙悉く之れに關係す。先覺、曾て吾等が生活に於て示していふ、「動物界は植物界なくんば生存する能はず、其の植物界は堅硬なる地殼が細微の土壤に變ずるにあらずんば生存する能はず、此の土壤は雨の爲に濕ほされて益々細微柔軟となる、而して其の雨は水の水蒸氣となつて空

中に吸收せられ、寒冷なる空氣に遇うて凝結せらるゝにあらざれば降る能はず、其の水蒸氣となるは地球が太陽の光によつて熱せらるゝを知らば一片の草の葉といへども全遊星のあらゆる排置、あらゆる運動と、あらゆる自然力とに由るにあらざれば生起する能はざるを知るべしと（フオン、パトエル）。奪つていへば萬物悉く吾に備り、與へていへば我れ直に天地に關與す。一は多を攝し、多は一を容る。一と多と相即相入する、これ法界の妙にあらずや。

鐘と撞木

臨濟に四料簡の説あり、採つて以て宇宙の觀察法とするを得んか。宇宙萬象之れを分ちて人と境との二とす、人とは主觀、境とは客觀。客觀的に見れば我も亦五尺の形骸、萬象皆物にあらざるなし。之れを奪人不奪境と

いふ。人なくして境のみあり。されど主観的に考察すれば我あるが故に物あり、我を離れて一法なし。これを奪境不奪人といふ。然れども主観といひ客観といひ、物といひ心といひ、人といひ境といふ、これ皆差別の假相にして平等なる本體を離れて存するなし。此の本體の上に見るを人境俱奪といふ。しかも平等の上に差別の相あり、物あり、心あり、相互相關係す。此の如くに見來るを人境俱不奪といふ。或る人、此の理を鐘と撞木に就いて喩へていふ。奪人不奪境は、

鐘は鳴ります撞木は鳴らぬ

鐘がなければ音はせぬ

と執するもの。奪境不奪人は、

鐘はならない撞木が鳴るよ

撞木なければ音はせぬ

といふもの。而して人境俱奪に至つては、

鐘が鳴るかや撞木が鳴るか

鐘と撞木の間に鳴る

と一見悟了したるが如くにして、未だ到らざるもの、たゞこれ空間何の音をか發すべき。人境俱不奪に於て、

鐘も鳴ります撞木も鳴るよ

鐘と撞木で音がする

と、一々の法に於て相依り相立つをいふ。最も平凡なるが如き所に最も妙趣あり。

萬物通ず

吾等が精神修養は我が心をして天地の心と相通せしむるにあり。無住法

師云、

聖人は常の心なし、萬人の心を以て心とす、法身は定れる身なし、萬物の身を以て身とす。

萬人の心を以て心とし、萬物の身を以て身とす。これ天地の心と相通するものにあらずや。苟も此の心を得れば其の身は小なりといへども以て天地に關與すべし。華嚴經にいふ、

佛は一切微塵の中に於て、無限の大神通力を示現す。

と。小必らずしも小にあらざるを知らば一、微塵裏に大神通を示現する豈に難からんや。又いふ、

如來眞身本二なし、物に應じ形に隨つて世間に滿つ。

物に應じ形に隨つて應用無礙なる所、これ直に天地の心を以て心とするもの。心を大にせよ、萬物悉く其の中に容る。張橫渠曰く、

心大なれば則ち百物皆通じ、心小なれば則ち百物皆病む。百物をして皆病ましむるは、之れ我が心、天地と相通せざるが故のみ。這般の格言精到に玩味するを要す。

天地の心と我が心

萬物既に一體たり、天地の心豈に我が心と通ぜざらんや。人心の秘奥に潜在して靈光時に閃くもの之れにあらざるなきか。妄念の雲深くして良心の光を隠し、心の波の常に荒れて本性の水靜なること稀なれど、心波澄靜妄念其の形を潛むるの時、吾等は此の天地の心の宿るを見る。洪川禪師の、一夜定中、忽然として前後際斷、絶妙の佳境に入り、恰も大死底の人の如し、一切物我あるを覺えず。只覺ゆ、吾が腔内の一氣、十方世界に瀾淪し、光輝無量、須臾にして蘇息するもの、如し。視聽言動、豁

然として平日に異る。是に於て試に天下の至理妙義を求むるに、頭々上に明かに、物々上に顯かなり。觀喜の餘、自ら手の舞ひ足の踏むを忘る。

といへるは、禪者の悟境を敍せるものにして、天地と我と冥合して一となるの快感。佐藤一齋は

深夜闇室に獨坐して群動皆息み、形影俱に泯ぶ。是に於て反觀すれば、たゞ方寸の内、炯然自ら照らすものあるを覺ゆ。恰も一點の燈火、闇室を照破するが如くに認得す。此れ正に是れ我が神光靈昭の本體、性命即ち此の物、道德即ち此の物、中和位育に至りても亦只是れ此の物、光輝宇宙に充塞するなり。

といへるも亦天地の心と冥合せるもの、吾等は此の靜坐冥想によつて天地の心と靈域相通するものあるを認めざるべからず。

母を慕ふの情

天地は萬物の母、吾等も亦天地に生まれ、天地に懷かれ、天地に育まる。されば吾等が天地の心を戀ふるは赤子が慈母を慕ふにも似たるべきか。プラトーンは之れを名けてイデアの戀と云ひぬ。イデアは宇宙の眞實體にして、眞善美として備はらざるなき天地の理想、吾等も亦之れより出てたれど宿習の然らしむる所、今はおほかた忘れはて、僅に依稀たる殘光を心の奥に認め得べきのみなれど、此の微けき殘光を辿りて昔の面影を憶ひ起さんとする所に、無限の快感を生ずるにあらずや。彼の一休が「本來の面目坊の立ち姿一と目見しより戀とこそなれ」といへるは卑調を以て此の哲理を言明せしにあらざるなきか。戀と云はんは餘りに卑し、吾等は母を慕ふの心と見てこそ此の情味の却て濃かなるを覺ゆれ。

心と自然

自然の興趣

天地は我を圍繞し、諸種の訓誨を不言の間に吾等に默示す。唯だ吾等の眼眩くして之れを色讀する能はざるのみ、芭蕉の耳なくして雷を聞いて聞き、葵花の眼なくして日に向つて轉ずる、風の斷雲を送つて嶺に歸り去り、月の流水に和して橋を過ぎ來る、青松の人の來往を礙へずして野水の心なくして自ら去留する、無心の中に有心の興あり。落霞と孤鶩と齊しく飛び、秋水と長天と共に一色なる、異中に同を存し、荷葉の團々として鏡よりも圓に、菱角の尖々として錐よりも尖き中に、同中異を語る。山色の清淨身にして谿聲の廣長舌なる、四時行はれ、萬物育する處に甚深の意義を

傳ふ。宇宙の法身は十方に遍滿し、自然の說法は天地を震駭す。見よ無字の經典、聽け自然の說法。吾等は自然に對して心裏に共鳴するものあるを感ず、其の二三を語らしめよ。

新天地

歲月悠悠、無限に通ず、何ぞ彼れを舊とし此れを新とせむ。しかも乾坤一轉して淑氣新に、人も亦其の間に處して志を新にす。旭日貞明、千古異らざるも、朝暉今曉、祥光あるを覺ゆ。道に過現なきも、人心之れを去來にし、徒らに過去を追想するものは模倣に満足し、悔恨に煩悶す。満足に發展なく、煩惱に懊惱あり。懊惱を慰むるものは常來の希望、發展を助くるものは新に生くるの工夫。日々新にして又日に新なる、これ新天地に立つの修養にあらずや。窓梅早や蕾を破り、黃鳥既に新晴に囀ず。新なる

哉、新。(大正三年一月)

柳暗花明

春色漸く闌ならんとする三月の天、芳草は柳烟に和して雨を帯びて青く、遅咲きの梅は早や櫻と妍を争うて、霞たなびく山の端に一段の色を添へ、自然は吾等を促して書齋より郊外に、閑居より吟筇に、柳暗花明の真趣を探らしめんとす。不盡の乾坤、春色遍し、誰か一掬の春水に無限の情を解し、一枝の春信に常住の理を讀むものぞ。江水漫々、舟、行くこと遅く、燕子喃喃、春の過ぐるを知らず。(大正三年三月)

花時風雨多

花を開かしむるの雨は、これ花を散らしむるの雨。人生禍福常に相半ば

す。禍を轉じて福と爲すは英靈漢の手腕、禍福を超越せるは脱俗の眼光。花時徒らに風雨の多さを啣つ。啣ちて何の用かある。寧ろ糸より細き春雨の花に濺ぐの閑寂を愛せずや。海棠一枝、雨を帯びて艶かに、落英繽紛、露に沾うて興趣一段を加ふ。「一雙の燕子簾前に語り、病客無寥盡日眠る、杏花開き遍くして人到らず、満庭の春雨絲烟の如き」光景は、雨を待つて見得べきにあらずや。隨時隨興、何ぞ他を恨みむ。(大正二年四月)

初夏

満天の新緑、満地の苔、苔青うして樹影黒く、樹緑にして露自ら白し。雲間を洩るゝ日の光は、青葉若葉を彩りて、疎竹を渡れる薫風は偶々痴蝶を誘うて瓶裏の薔薇に戯れしむ。蝶去つて人は眠より覺め、机上半ば繙き來りし南華を把つて誰やらの「蝶一つ我れに添寝の山家かな」といへる景

趣を味はしむ。一室閑寂、人語絶えて鳥聲の晴を欣ぶを聞く。(大正三年五月)

樹上の蟬

暑雨初めて過ぎて爽氣清く、日は山の端に落ちんとして滿林の蟬聲涼風を呼ぶ。人間若し樹上の蟬を學び得べくんば、還た悲觀の我を苦むるなからむ。身を危葉に托して危きを知らず、生を風露に養うて足らざるを憂へず、「やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲」春秋を知らねども、もと不平の聲なく、須臾の生を樂みて頌を炎帝に上り、歌を松吹く風と合せ、聲を潺緩たる溪流に和して大演奏を暮れ行く夏の天地に奏づ。若し夫れ塵寰を蟬脱し、地に尸解を遺して、蟬の羽衣いと軽く、杳然として悠久に入るに至つては、彼れも亦登仙の客たらむか。(大正三年七月)

月下の蟲聲

氣、澄み、風、清くして一輪の明月、峯の松が枝に懸り、影を咲き亂れたる秋草の上に落して、露華千點、月を讚美の蟲の音、涼し。嗚呼月に古今の變なく、幾度か詩人の懐に入り、月に東西の別なく、今も朱門と白屋とを照らす。想ふ昔、曹孟徳が鋒を横へて烏鵲南に飛ぶを見たりし月、今はライン河畔、百萬の貔貅が露營の夢に入り、極東讀書子が窓頭の光、同じく北歐艦艦の上を照らす。天は高し中秋の夜、若し高處に高觀し、遠處に達觀せば、吾等は實に月を讚美の蟲なるらし。(大正三年九月)

時雨降る夜

「ちよしぐれ板屋の軒は降り過ぎぬまた誰が夢かおどろかすらん」中宵、

夢破れて獨り自から想ふ。秋、老いて凄涼の氣、室を襲ひ、夜、闌にして
 哀愁の情、人に迫る。心澄みて眠成らず、戸を開けば月未だ落ちずして窓
 に印せる梧桐の一片二葉落つると見るまに、残りの影は消えて、點々戸に
 當るは初時雨の早や訪るゝか、蕭々たる雨聲は婆娑たる落葉の聲と和して
 秋思一段深し。雨止みて影を印せる梧桐一片なく、影隠れて雨復た來る。
 時雨ふる夜の寢覺ほど實に興あるはなし。夢は回る歴々雨聲の中、吾等の
 心裏に自から共鳴するものあるを覺ゆ。(大正三年十一月)

菊花頌

春露、其の色を染めず、秋霜、其の條を改めず、千代に八千代に千代見
 草の壽長きこそ、吾等が祝福すべき花ならずや。昔は南陽縣にありて其の
 下流を汲むものの命を延べ、劉生の丹法に交りては五百歳の壽を保ち、康

風子は之れを服して仙に入る。しかも延命長壽は此の花の誇にあらず、流
 に浮ぶ半輪の花は楠氏七生報國の志を傳へ、東籬に色添ふ此の花は淵明が
 清節を傳ふ。白華金蕊、天に向うて其の氣高さを示し、英語のクリサンシ
 マムは、もと羅甸のクリンス即ち黄金とアンセモム即ち花との二字より成
 る。「欄干に上るや菊の影法師」又富貴の趣を存す。其の富むもの財ならん
 や、財貧にして道富む。其の早春莖葉を生じ、晚秋清芬を吐き、霜を冒し
 て芳姿衰へざる、豈に俗人の鑑賞に媚びんや。「植ゑすて、今年も白し菊の
 花」一枝の菊吾等に教ふる所少からず。(大正二年十一月)

年窮歲盡

今年も亦逝くか。百花紅葉皆枝を謝して東籬の殘菊亦霜に凋れ、寒風は
 枯林を吹いて「野は枯れく涙にくぼむ石の文字」満目蕭條の景ならざる

はなし。嗚呼、今年も逝くか。野邊の草も一たびは花咲きぬ。吾、此の一年、何の花をか著けたる。深山の木も一たびは實を結びぬ。吾、此の三百六十五日、何の實をか結べる。終歲、蕭條花なく實なし、齷齪として此に又年を送る。「ひととせははかなき夢の心地して暮れぬる今日ぞ驚かれぬる」年窮歲盡、誰か此の感なからむ。僅に東風の訪れて梅蕾一點の笑を示すによつて慰むるのみ。(大正二年十二月)

靈覺

自然は外より我れに默示し、心裏の靈光は内より動きて、機を見て送り出でんとす。内外相應して豁然として貫通する時、こゝに靈覺あり。ニユートンはバタリと落つる林檎の音に宇宙の大理法を色讀し、ワットはゴトリと上る鐵瓶の蓋に自然の妙用を體得し、芭蕉は因地一聲、蛙飛び込む

音に正風の眼を開き、我が大聖釋尊は臘月八日の明星に天地と冥合す。求めよ、さらば與へらるべし。靈覺何ぞ遠きにあらむ、眼前事後に其の機は伏し、觸目道中悉く天地の心にあらざるはなし。禪家云はずや、「無邊の風月眼中の眼、不盡の乾坤燈外の燈、柳は暗く花明かなり。十萬戸、門を敲けば處々に人の響ふるあり」と。敲けよ、必らず響ふるものあらむ。

天地の經卷

不立文字を標榜する禪は直に此の天地を以て一大經卷とし、鹿門の覺禪師は「盡大地是れ學人が一卷の經、盡乾坤是れ學人が一隻の眼、這個の眼を以て如是の經を讀むこと百千萬劫、常に間斷なし」といふ。這個の眼光を以て如是の經を讀む、これ自然を體得する所以。白隱禪師いふ、

畢波羅窟裡。

未結集此經。

童壽譯無語。阿難豈得聽。

北風窓紙隙。南雁雪蘆汀。

山月苦如瘦。寒雲凍欲零。

千佛縱出世。不添減一丁。

畢波羅窟は一切の經典を結集する所、しかも此の無字の經を收めず。童壽は譯經の大家、しかも此の不文の典を傳ふる能はず、阿難は佛の講座に侍して終始其の教を聽くも、未だ此の無言の大説法を聽取せず。北風吹き送る窓紙の隙、南雁來り泊す雪蘆の汀、こゝに大經典あり。山月影凄く、寒雲凍る處、こゝに大説法あり。不増の乾坤、不滅の天地、一ページだも増減し能はざる所に、此の經の妙あるにあらずや。

他に贈り難し

梁人陶弘、華陽の山中に隱居す。人あり之れに問うて曰く「山中何の有る所ぞ」と。弘、答へていふ、

山中何所有。嶺上多白雲。

但可自怡悅。不堪持贈君。

自然は多大の慰安を與ふ。獨り山に對するの時、其の快、他に傳へ難きものあり。

自然を樂しめ

人事葛藤の中に没頭して我を立て我を執じ、自ら苦み、他を苦む。去て自然の光景を見よ。雲、心なくして岫を出て、風、心なくして樹頭を過ぐ。道の邊に咲く花に無限の情趣を味ひ、舞ひ行く蝶の戯れに、我、吾を忘る。若し夫れ見上ぐるばかりの懸崖より千丈の銀線垂下し來つて、飛湍、岩を嚼

むの壯絶なるに接しては、崇高の情、我を驅つて自然に同化せしむるを覺ゆ。古人いふ、「一日の勝に遊べば一日の神仙となる」と。自然の興趣ほど我を楽しましむるはなし。

まことともて交る時は天の下

わが友ならぬ人やなからむ

(八田知紀)

言の葉の多かるよりや自から

誠すくなき罪やうくらむ

(小澤蘆庵)

ふみよめば昔の人はなかりけり

みな今もある我が友にして

(本居宣長)

達観

洞然明白

達観の訣、他なし、天地の心を以て心とするにあり。天地公明、何の隠すなし、ニュートン出てざるも引力の理は不斷に行はれ、ワット出てざるも蒸氣の作用は脱白に公示せられ、抑も亦コロンブス出てざるも西半球は殿然として存せしなり。人自ら眼を閉ぢて天地の理に暗く、自然の教を棄つ。棄つれども怒らず、依然として之れを公開す。人若し此の如くなるを得ば何の疾しきことかあらむ。「信心銘」にいふ、

至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。

洞然明白。毫釐有差。天地懸隔。

と。宇宙の大道、坦々として山河の嶮なし、しかも差別の揀擇によつて憎愛を生ずるは吾等の私情。公平なる天地の理法は、其の引力の應用に於て珠玉と瓦礫とを擇ばず、其の變化の大則は富貴と貧賤とを問はず、世間公道、白髪を推す、朱門白屋、等しく訪れざるはなし。吾等の心をして此の如く公平ならしめよ。然らば洞然として明白なるものあらむ。

秘密病

予曾て時事に慨して秘密病なる一文を稿す、又以て心病を指摘するに足らむか。次に掲ぐるもの即ち是れ。

一

天下の至公に居り、天下の至正を行ふ。何者か又我を累するものあらむ。蓋し公明正大は爲政の訣にして人心收攬の能事これに過ぎたるはなし。現

下、天下の大患たるもの不公の病源より來つて不正の難症となる。武臣、錢を愛して財産の公開を拒み、文臣、私情に驅られて公明の策を厭ふ。此の如くにして天下惑亂せざること、古より未だ曾て之れあらざるなり。乾坤は脱白に公開せられ、宇宙は赤裸に暴露す。強ひて之れを蔽はんとするも、隠れたるより現れざるはなく、一時の糊塗は、末代の失敗となり、目前の隱蔽は百年の禍根を因す。公明なれ、正大なれ。これ最も強きものにして、亦最も力あるものなり。

二

一切を公開して他の品隣に任す。是とするも可、非とするも妨げず。大丈夫の心事、此の白日青天の如くにして、初めて事を天下と共にすべし。妄りに小計小策を弄し、私情に驅られ、私曲を掩ひ、糊塗百端、漏縫徒らに努むるとも、塗られたるものは剝落し、縫はれたるものは破綻し、終に

醜態を江湖に暴露せざるを得ざるに至るべし。

三

昨日まで崇敬の對象たりし偉人、一朝にして唾棄の標的となる。漫に世評の頼みなきを啣つ勿れ。汝の言行にして表裏相應せば、誰か好んで火なきに烟あるを云はむ。表裏相應は聖者の行履、八面玲瓏は君子の態度。現代、此の公明を缺くが故に、終生毀譽の中に没頭して出づる所を知らず。蓋し弊なり、大なる弊なり、國を亡ぼすの弊なり。

四

誤れる哉、現代人。脱白なるものを淺薄と嘲り、強ひて事を秘密にするものを以て、思慮深しといひ、奥行ありと稱す。殊に知らず、一切の醜事は此の秘密の中に行はれ、滔天の罪惡は此の不公不明の中に胎むを。堂々として取るべきを取り與ふべきを與ふ、何の醜か此の中に行はれ、何の惡

か此の中に胎むべき。取る能はざるを取らんとし、與ふべからざるを與へんとするが故に、秘密は必須の條件となり、以て天下の目を盗み、群衆の耳を奪ふ。

五

得々、秘密を行つて、天下を盲にし、群衆を聾にし、厚顔世を欺き得たるを誇るとも、衷心、終に欺く能はざる一物なきか。那箇の一物より痲痺し盡くすとも、世に飛耳張目の士あり、昭々たる天は口なきも此の如きの人によつて發く所とならざるものは少し。よし惡運強くして一人の之れを發くものなくとも、其の之れあるを恐るゝ心裡の煩悶は、永へに消えざるものあらん。秘密病の自を苦むるは他を苦むるより更に大なり。何者の痴漢ぞ、此の苦悶を忍んで、僅に一時の糊塗を策せむとはする。

六

政界、時に秘密の要なしとは云はず。されど、それは國家民人の福利の爲め暫く群衆に知らしめざるを利なりとする場合に限らるべきものにして私黨の利益の爲め、若くは私人の利益の爲めに於て許すべきにあらず。此の許すべからざるを敢てして、秘密の貴ぶべきを云ふは、陋の又陋なるもの。政は正なり。公正に何の秘密をか要せん。

七

秘密病の流行は政界のみにあらず。社會の各方面に蔓延し、皆相争うて秘密の利を得むとす。「此事はどうか秘密に」といふことに碌なことなし。事に疚しきあるか、業に弱き所あるものなり。疚しき所あるが故に公明を恥ぢ、弱き所あるが故に他の強さを畏る。大丈夫起つて自由競争の天地に事業を企畫す。何の要あつて殊更に秘密を頼まむ。勝たば則ち堂々として勝ち、負くれば則ち堂々として負く。此の如くにして勝敗共に俯仰天地に

恥ぢざるものあらむ。

八

秘密病は隱險を生み、誑詐を生み、權略を生み、欺瞞を生み、虚偽を生み、コンミッションとなり、袖の下となり、賄賂となり、私曲となり、奸策となる。天下、此の秘密を事とするが故に、爬羅剔抉、發いて快とするものを生じ、其の之れあるを憂へて秘密は益々秘密に、隱蔽はいよいよ深からむとし、事毎に表裏を生じ、口、言ふ所、心に思ふ所と背き、心に思ふ所、身に行ふ所に反し、簡單なるべき人生を強ひて紛糾せしめ、整然たる公道を蹂躪して自ら其の非なるを知らず。親子の間に秘密あり、兄弟の間に秘密あり、夫婦の間に秘密あり、朋友の間に秘密あり、個人より社會に及び、家庭より國家に及べる此の大病源にして根絶せずんば、世態の革新終に見る能はじ。

隠すことなし

洞然明白、天地何の隠す所あらむ。天地の心を以て心とする聖人亦何の隠す所かあるべき。孔子いふ、二三子我れを以て隠すとすか、吾、爾に隠すことなしと。黃龍祖心禪師、詩人黃山谷に質すに此の語を以てす。山谷諄々として説く。禪師肯はずして曰く不是不是と。對へんと擬するも亦顧みず、山谷迷悶して已まず。時に暑退き涼生じて、秋香、室に満ち、巖桂盛んに開く。禪師いふ、

「木犀花の香を聞くか。」

山谷曰く、

「聞く。」

禪師いふ、

「吾、爾に隠すことなし。」

山谷、懐に釋然たるものあり。謝していふ、

「和尚恁麼に老婆心切なるを得たり。」

と。黃龍和尚亦隠すことなし。これ此の公案仔細に味到すれば、天地の心を體得するを得んか。

順逆の外に立つ

變化は宇宙の當相、國に萬年の榮なく、人に千年の壽なし。盛なるものは衰へ、満てるものは虧く。盛なりとて頼むべからず、衰へたりとて悲むに足らず、興亡の跡を達觀し、榮枯の理を洞察す。順境にあつて誇らず、逆境にあつて撓まず、能く順逆二境を超越して復た他の爲に累せられざる心を養ふを得んか。佐藤一齋いふ、

順境は春の如し、出遊花を觀る。逆境は冬の如し、堅臥して雪を觀る。春もとより樂むべし、冬も亦惡しからず。心を順逆の外に置き、思ひを榮枯の上に立つ、これ達人達觀の妙致なり。

賣茶翁の自警

賣茶翁の風流は世多く之れを傳ふ。彼れが自警箴の如き、眞に彼れが心的生活を窺ふべきもの、

夢幻生涯夢幻居。了知幻化絶親疎。
貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還有餘。
無事心頭情自寂。無心事上境都如。
吾儕苟得體此意。廓落胸襟同大虛。
廓落たる胸襟、大虛と同じくして初めて心頭事なく、事上に心なきを得

べし。賣茶果して之れを得たり。其の辭世にいふ。
劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。
杳として彼れは白雲の中に入れり。

正念坊

世に正念坊の一枚起請と稱するものを傳ふ。飄逸の中に教訓あり。彼れ亦尋常の僧にはあらず。其の文にいふ、

もろこし我が朝のもろくの智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にあら
ず、又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず、只不用の者に
は世の妨となるまでとさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとり
て隱居するより外、別の仔細は候はず。但し肝心の世渡りと申すこと
の候へども、皆衣食住の中にこもり候なり。此の外に慾深きことを存

せば諸人のあはれみにも外れ候べし。たとひ蓆をかぶり糟糠をなめ、人の軒端に臥せるとも、食ひては寝、食ひては遊ぶ、君が代のありがたさを忘れれば、身は安樂になりたりとも、生きたる甲斐もあるまじく候。あなかしこ。

と。其の辭世が更に奇抜なり。

來て見ても來て見ても皆同じこと

こゝらてちよつと死んで見ようか

死を見る此の如き彼れも亦一個の達觀者流なり。

花咲かぬ身

世事紛々限りなくして我が力に限りあり。限りあるの力を以て限りなきの世事に對す、其の能はざる多きは當然のみ。しかも自ら揣らざる吾等の

心は盲目的の欲求に驅られて徒らに煩悶し懊惱す。此に於て心に一日の平安なく、身に瞬時の休養なし。人々各々分あり。天稟の性、遺傳の力、皆我れを制縛し、脱せんとして脱する能はざらしむ。自ら其の力を知りて分に安んずるは身心慰安の一法。

花さかぬ身は静なる柳かな

花紅柳緑各々其の分あり。花さかぬ身に安んずる柳は又心静なるものにあらずや。世に菅公の咏として傳ふるものあり。

牛の子に踏まるな庭の蝸牛

角ありとても身をなたのみそ

蝸牛の角を以て大牛に對せんとするが、吾等を惱ます慾望にあらずや。

安分の法

彼れ畢竟我にあらざ、強て彼れに模せんとして成功すべきか、人々其の業あり。これを樂む所に萬法差別の眞理は顯現せらる。俳人一茶が勸農の詞は瀟洒の筆を以て能く知足の福音を説き、洒脫の文を以て安分の教訓を垂る。

風流を樂む花園ならて、後の畑 前の田の作物に志し、先祖の賜と命の親に懇をつくし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕、心を留めて打ちひかふ菜種の花は、井出の山富貴よりも好ましく、麥の穂の色は、牡丹芍薬より腹こたへあるかと覺ゆ。朝顔より夕顔ぞよけれ、萩菊よりは芋午莠に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の植物なり、稻の穂並の賑はしく、藁の前より腹滿つる心地して、粟穂に馴る、鶉、野邊の蟲の音面白く、遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りが飽さず。松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり。上作の

名劍より鎌鍬は調法なり。書畫の掛物より掛けて見る作物の肥料を油斷せず、投入立花の工より茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶湯蹴鞠の遊より澁茶を呑んで昔語こそおかしけれ。玉の臺より茅葺の家居が心易く、高きに居らねば落つるあふなげなく、迷はねば悟らず、念佛の代りに業を怠らず、實義を盡くして神詣に比し、仁者に習うて山には木を植ゑ、智者の心を汲んで田の水加減を専らにし、珍肴鮮肉の料理より、錢入らずの雑飯が後腹病める氣遣ひなし。すべて世の中は飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀬となる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も終にはほろび、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代に過ぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も遂に一代なり。時すぎ世かはれば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある内、伽羅蘭麝もかく中のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障り、遊興は暫時の

夢。他の富めるも羨まず、身の貧きも歎かず。唯だ慎むべきは貪慾、
恐るべきは奢りなり。
慎むべきは貪慾、恐るべきは驕奢、我を執ずるが故に貪り、我を立つるが
故に驕る。驕るもの久しからざるは此の文の既に云へる所、知足安分これ
實に安心の法門なり。

汁一つ

曾て水戸の武公に就て好個の逸話を聞く。武公、水戸家相續の初めの正
月、如何なる不注意にや、汁椀に汁の盛られざりしに、膳部方の人々縁喜
を祝ふ正月に思ひも寄らぬ此の失策、やがては切腹も仰せ付けらるべきか
と苦慮せしに、武公は少しも怒らず、
汁一つなくとも飯は食へるなり

足らぬを物の始めとはして
と仰せられしに、家臣等愁眉を開きしと。此の事を聞き傳へられし紀州侯
は

汁一つなくとも飯は食へるこそ

よろづ事足る始めなりけれ

との歌を贈りて祝意を表されしと。足るをすれば足らざるなし。足らざる
なき所、これ心を安んずべき所にあらずや。

あきらめ主義

知足は安心の法なりと雖も、爲すべきを爲さず、能ふべきを欲せず、何
事も諦め了らんとする消極的方法は、決して天地の理法に適へるものに
あらず。彼れも人なり、我れも人。唯だ我れ其の守る所に立つと雖も、敢て

彼に劣るべきにあらず。諦めざるべからざるを諦めずして、徒らに心を勞するは愚人の行爲、破れた茶碗を合せて見るの氣苦勞と同一、妄りに心を苦むるに過ぎざれど、諦むべからざるを諦め向上の意氣を沮喪せしめ、發展の精神を抑止し強ひて自己を縮小せんとするは、人生の進歩を阻害する卑怯の行動たらざるを得ず。

人格の權威

我以外に我なし。我豈に漫に他に累せらるべけんや。我自ら操持する所に立つ、黄金何かあらむ、權貴何かあらむ。殆ど知足安分の宣傳者の如くに見らるゝ一茶も、加州侯の權貴に屈せずして、

何のその百萬石も笹の露

と喝破せる所に、彼れの人格の權威はあれ。雪潭和尚、曾て尾州犬山侯の

聘に應じて禪録を提唱す。侯、簾を垂れて徐ろに之を聽く。雪潭、叱して
ふよ、

「柄の講釋には精はない、灑して聽くには及ばぬ。」

と。侯、簾を撤して拜謝すと。道に志すもの此の權威なかるべからず。

大處大觀

萬物は相互微細に影響す。大局より打算すれば甲の失ふ所は乙の得る所、何をか惜み、何をか貪らん、加賀の服部元好は醫を業とし頗る達觀の風あり。其の家の祝融の災に遇ふや、人あり、戯れに云ふ、

「お醫者さん家の黒焼何になる。」

元好、言下に答へて、

「日雇大工の腹藥なり。」

と。心を置く此の如く大にして初めて大處に大觀するを得べきか。吾等常に我を中心とせる小範圍に局促し、一步も埒外に出る能はずして苦慮し焦心す。此の桎梏を脱せよ、此の繫縛を離れよ。さらば汝は無礙自在なるを得ん。

本末

萬法差別の相に没頭するが故に、出離の途なきは吾等が常習なり。眼を萬法一如の體に著けよ。もとこれ一、何の迷ふ所かあらむ。一如は本にして萬法は末、末に走れば岐路百出、本を把持すれば大道坦然。相に迷うて自他の別、憎愛の差を生ずべきも、體を悟りて一視平等、猶ほ先づ鏡を明にして、萬象其の影を印するが如きか。

明鏡を打破せよ

僧あり、靈雲和尚に問ふ、

「純清絶點を得る時如何。」

と。蓋し其の心の明鏡の塵なきが如きをいふなり。靈雲、喝していふ、

「尚ほ是れ眞常の流注。」

眞常の流注とは妄想亂起の義。僧大に迷ひ、更に問ふ、

「向上更に事ありや。」

純清絶點尚ほこれ妄想とす、此の明鏡抑も何の塵點かある。若し之れをしも不是なりとせば更に以上のものあるか。

「有り。」

有れば聴かざるべからず。

「如何なるか是れ向上の事。」

靈雲、慈誨懇切、喝破していふ、

「明鏡を打破し來れ、我、汝と相見せん。」

果然、其の僧は明鏡なるものを執持して放つ能はず。心を鏡の塵なきが如くにして何の用かある。鏡は萬象を映す所に妙あるにあらずや。悟れりといふも亦迷なり。眞の悟境は迷悟を超越したる所にあり。

とやかくとたくみし桶の底ぬけて

水たまらねば月も宿らず

四智

佛教、四智を説く。吾等の心をして鏡の如くならしむるもの、これ大圓鏡智なり。此の大圓鏡によつて萬象歴然たる差別を看取するは妙觀察智な

り。しかも其の本體に於て平等一如なるを知るを平等性智と名け、其の本一にして其の相異なるものが、各々其の用を盡くして相侵さざる所を見るを成所作智とす。これ天地の心、直に我が心と映發せるもの、四智圓にして達觀其の妙を究むるを得んか。

達人

我は天地の一員、萬象は來りて我を助く。我若し我が眼を開かば何物か採つて以て我が技を補はざらん。或る鍛工は南無阿彌陀佛と無心に叩く伏鐘の音に豁然として技の呼吸を悟り、或る武士は雪に壓さるゝ庭の竹の壓され壓されて勃然として立てるに滿を引いて放つ弓術の極意を自覺し、名人といはれし俳優五代目尾上菊五郎は強請に來りし破落漢の身振を見て我が藝の資に供し、義太夫語りの名手攝津大掾は夫婦喧嘩に苦慮する弟子を

叱して「多くの語り物の中には女が怒る所もあらう、夫婦喧嘩の其の時にも妻の素振に教訓を得ようとはせぬか」といひしと傳へられ、畫家良秀は家の焼けたるを見つゝ不動の火焰を描くの料に供せしと云はるゝ、皆其の見聞する所を以て直に自家の技に廻向せしもの。凡人の眼に入りては雲烟過眼視することも達人の眼に映じては其の資となり料となる。

他の奇なし

技、妙に入り、藝、神に通じては、他の奇なし、奇を弄し巧を悉くすは凡庸を距る未だ一步なるのみ。劍客塚原ト傳の其の三子を試みんとするや、扉上に枕を置き、入るに應じて之れを落下せしむるの仕掛とし、先づ第三子と呼ぶ。彼れ進んで入らんとすれば枕落下し來る。電光石火、忽ち腰刀を抜いて之れを打つ。技の神速、人をして驚嘆せしむるものあり。ト傳之

れを許さず、枕を元の如くにして更に第二子と呼ぶ。二子は其の落下し來るものを受け止めて、悠々として坐に就く。態度從容、少しも騒げる色なし。ト傳次ぎに長子を試む。長子入らんとして徐ろに扉上の枕を見、先づ之れを下ろして而して後に進む。ト傳見て以て我が神を得たりとす。何の妙なく何の奇なきに似て、しかも用意の頗る周到なるを見る。馬術に於ても亦相似たる一話を傳ふ。馬術者技相如く三人の門弟を試みんとし、門扉の後に悍馬を繋ぐ。初めの者の入らんとするや、馬忽ち後脚を上げて之れを蹴らんとす。真にこれ危機一髪。ヒラリと飛びし至藝は能く之れを免るを得たり。次の者入らんとするや、馬又足を上げて蹴らんとす。其の者威を正して一睨すれば馬萎縮して蹴る能はず。此二者皆技神の如きもの。第三の者は入らんとして馬あるを知り、迂廻して進み來る。師いふ、此の者以て我が奥義を傳ふべしと。到り得、還り來つて別事なきの妙此に存す。道

元禪師の法を求めて宋に入るや、天童如淨禪師に參じて大悟徹底す。しかも其の歸るに當りて「空手郷に還る」といふ。此の無一物の處に無盡藏の理を拉し來りたるにあらずや。至道無難、豈に他の奇あらんや。

平常心

僧あり、趙州和尚に問ふ、「如何なるか是れ道」と。州いふ「平常心是れ道」と。天地の心を體得し天地の心を行ふ。平常の坐臥もと道と相離れず。「近世畸人傳」が傳ふる所の大黒屋傳兵衛の如きは其の類か。傳兵衛、家、質商を營み、慈仁の心深く財餘りあれば貧民を賑はす、中山の知真老師其の心解する所を見んと欲し、一日之れを訪ひ、突如として「傳兵衛何を爲て居る。」と問ふ。彼れ今帳簿を手にして之れを點檢しつゝあり。直に答へて、

「大般若經を轉讀いたして居ります。」
何の大般若經ぞ。老師笑つていふ、
「其の經何の功德かある。」
傳兵衛、聲に應じて、
「日々此の經を轉讀することによつて、家内餓えず凍えず、且つ貧民を恤み得ること偏に此の經の功德なり。」
と。日行中此の心を失はざる所に、天地の心は顯現せらるゝにあらずや。

心の識得

曹洞の道元禪師いふ、「古人曰く、若し人、心を識得すれば大地に寸土なしと。知るべし、心を識得する時、蓋天撲落し、匝地裂破するを。古徳曰く作麼生かこれ妙淨明心、山河大地日月星辰と。明かに知りぬ、心とは山

河大地なり、日月星辰なり」と。玄旨幽遠、遽に識得し難きも、天地に先ちて形なく、萬象を去りて其の姿を見ず。黄蘗の傳心法要にいふ「此の本源清淨心、常に自ら圓明にして徧く照らすも、世人悟らず。只だ見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知に覆はれて精明の本體を見ず。唯だ直下無心なれば本體自ら現すること、大日輪の虚空に昇りて徧く十方を照らし、更に障礙なきが如し」と。直下無心の境、これ天地の心と相通するもの。

佛とは誰が結びけん白糸の

賤の小田巻くりかへし見よ

再思三思し見よ、心裏に靈光あり、十方に遍からん。上來縷々として婆説する所、もとこれ敲門の瓦子、心の識得に於て資する多からざるべしと雖も、引用し來れる金玉の訓誨、妙悟の芳躅、これによつて幾分を窺ふあらば幸に無用の閑事業に畢らざるべきか。

何れにも置かざる心

修養の極致は全自己の顯現にあり。天地と共鳴し、宇宙と靈觸する眞我を發揮するを要す。如何か全自己を顯現し、眞我を發揮すべき。古徳いふ「佛法を學ぶといふは自己を學ぶなり、自己を學ぶといふは自己を忘るなり、自己を忘るゝの時、自己は萬法に證せらる」と。萬法、自己を證す。これ自己と萬法と二にして不二、天地と我と相離れず、宇宙の大道と我が踏む所と合致し、乾坤の妙用と自己の動作と何の背くなきを得む。これ此の時心ありといへば則ちあり、しかも天地に遍満す、心なしといへば則ち無し、何をか名けて心とせむ。澤庵、曾て柳生宗矩に問ふ、

「劔刃相交るの時、心を何れに置く。」
宗矩いふ、

「敵の刃の先に置く。」

澤庵、

「敵の刃の先に置くものは敵の刃に心を奪はる。」

「然らば我が刃の先に置かんか。」

「我が刃の先に置くものは我が刃に心を奪はる。」

「されば臍下丹田に置くべきか。」

「否、臍下丹田に置くものは臍下丹田に心を奪はる。」

「畢竟、何れの處にか置くべき。」

澤庵終に斷案を下していふ、

「心を何れにも置くことなかれ、何れにも置かざる時、何れとして心なら

ざるなきを得べし。」

と。何れにも置かざる心、これ全心遍滿。事に應じ、機に臨みて顯現すべ

きものにあらずや。

陰晴共に可なり

毀譽常なきは浮世の常、陰晴定めなきは秋の空のみにあらず。徒らに心を勞して何かせん。鐵舟、歌あり、

晴れてよし曇りてもよし富士の山

もとの姿はかはらざりけり

もとの姿の變らざる所に、自己の眞骨頭は巍然として白雲の間に獨露するものあり。

借宅證

豪潮律師は近代の大徳、尾張の國龜崎正通寺に其の借宅證文なるもの

を藏す。文に、

借宅證文の事

一 地水火風空作り家 一 軒

右借用仕候處實證也、御入用の節は何時にても差上可申候、爲後日如件

サア〜宿かへの御用心〜

豪潮書

地水火風空は我が身の要素、此の組み合せになる生命、何時宿替を仰せ付かるやも知らず、御用心〜の結尾大に振ふものあるを覺ゆ。

雅懷

吾等の心の狭く且つ小さきことよ。「蚊一つに施しかぬる我が身かな」一滴

の血をも尚ほ且つ之れを惜み、一握の財も之れを施す能はず、越後の良寛飄逸にして清高、艸庵の下なる筍の縁を破つて生ひ伸びしを憫みて之れを除かず、却て風流のすさびと喜び、落葉、庵を埋むるを見ては、焚くほどは風が持てくる落葉かなと樂む。何ぞ其の心の大なる。彼れは自然を把つて自家の用に供するの雅懷を有せるなり。

心の高き

鏡は其の形方寸なれども能く萬象の影を映す。我が心小なるが如しと雖も、高く九天の上にも出づべし。此の心を養ひて天地と合致するもの、何物か能く其の高を争ふべき。人あり、富士見西行の圖に贊していふ、見る人の心高きにくらぶれば

ひくさも低し富士のしほ山
と。心を把得する此の如くにして萬象を下瞰し、天地を小とするの氣宇を
養ひ得んか。

人のつらさ

達觀の妙は順逆の二境を超越し、苦樂の岐路に彷徨せざるにあり、蓮
月の歌に

宿かさぬ人のつらさをなさけにて

おぼろ月夜に花の下ふし

とあるは逆境を順化し、苦境を樂觀せるもの。しかも尙ほ故造作意の痕
あり。人のつらさを強ひてなさけに曲解せんとする所、未だ此の二境に超
越せるを見ず。近藤芳樹の之れを改めて

宿かさぬ人のつらさを忘れけり
おぼろ月夜に花の下ふし
とせば興趣一段深しといへるは、見地も亦一段高し。順逆相忘、自然に
して却て妙。

心の忙了

愚なりと知りながら、愚なることに心を勞し、想うて益なしと知りなが
ら、益なきことに心を苦しむ。彼の迷妄の信に心裏を感亂せらるゝ如き其の
最も甚しきもの、京都の某公卿、元旦に福茶の禮を行はんとせられしに、
給仕人の過つて其の土瓶を割りしかば、福破れたりとて大に怒り、其の者
を放逐せんと云はるゝに驚きて鄰家なる加茂幸長翁に詫を頼みしに、翁は
「さて今朝の出來事は目出度瑞相とこそ存じ候」とて、筆を執りて

元日にとん(鈍)とひん(貧)とを打ち破りて

あとに残るは金のつるなり

と認められしに、公の意も解けたりといふ。兒戯に等しき迷信に囚はれて達觀の明を缺くは凡夫の常情、よし此の如くに甚しからざるも、如何に左思右思するとも我が力の左右し得べきにあらざる明日の天候を氣にして徒らに心を勞し、如何に追懷するとも還らざる過去に思ひ煩うて苦慮百端す。吾等が心頭に掛り來る驢事馬事多くは此の類。其の爲に忙殺せられて心裏一日の安なきは、寧ろ憫笑すべきにあらずや。

心の餘裕

雜念に忙了せられ、妄想に煩殺せられ、心内些の餘裕なきが故に、物に應じ事に臨みて自由なるを得ず、甲に囚はれ、乙に縛せられ、營々として

獨り自ら苦み、一生を空過し了る。古人いふ、

無事此靜坐。 一日又兩日。

若活七十年。 便是百四十。

心を靜かにせよ。これ心力の蓄積なり。物に應じて迷り、事に臨みて現はる。常に心力を徒費するもの事に専らなる能はず、物に精なるを得ず。然らば如何に之れを蓄ふべき、天地の秩序整然たるが如く我が心象を整理するより善きはなし。心象既に整理せらる。求むるに従つて出て尋ぬるに任せて現る。かくて閒事の心頭に掛くるなくんば、春は百花あり、秋は月あり、夏は涼風あり、冬は雪あり。便ち是れ人間の好時節たるを得んか。

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえてすゞしかりけり

古歌此の福音を傳ふ。

心に任す

上來縷々として婆説し來る所、人の心の左觀右觀、讀む人、長しとするか、短しとするか。長とし短とする、もと其の人の心に任す。先賢いふ「清話濃かなる時尺還た短く、安禪倦む處寸猶ほ長し」と。長しと見るも可、短しとするも亦不可なし。唯だ自ら拈得する所ならば婆説の中に清話の濃かなるを聞き、冗舌の中に安禪の倦むなきものあらむか。

附 録 生活と心

現實問題

修養を論じ、道德を語る、其の云ふ所は立派であるが、さて之れを實際に應用せんとすると、なか／＼困難で、理論と實際との間に非常な距離があるといふことは、現代の弊であると思ふのであります。理論は立派であるが、之を實際に應用してはどうかといふと、直ちに應用する事はなかなか出来ないといふやうな場合があるので、人生の根本問題を研究するといふことに就ては、高遠なる理想の問題は固より必要であるが、現實の問題としては、非常に距離があるが爲めに、常に修養を論じ、道德を語るものが、迂儒として實際家に笑はれるは免がれない事であります。昔希臘の或

哲學者が渡し船に乗りながら船頭に向つて、汝はオントロジイといふ事を知つて居るかと問うた。オントロジイといふのは、實體學とても譯すべきもので、天地人生の根本問題を研究するところの、高遠なる學問である。そんな事は固より船頭の知るところでないから、船頭は、私はそんなものは知りませんといふと、哲學者先生は、オントロジイを知らざるものは、人生の半ばを空過するものであるというて笑つた。さて其船が對岸に著かうとした場合に、波の煽りを喰つて、船が動搖した。其時に船頭が、貴方は水泳を御存じてあるかといふ。いや俺はそんなものは知らぬといふと、水泳を知らぬものは、目下の急を救ふことが出来ぬというて笑つたといふ話を聞いたことがある。私の茲にお話するのは、高遠な理想の問題でなく、又根本の深い問題でもなくして、實際的の現實の問題に付いて、少しばかり愚見を述べて見ようと思ふのであります。

獨立生活の意義

此の頃簡易生活とか質素な生活といふ事をいひますが、私は是よりも必要なのは、獨立生活といふ事であると思ひます。質素儉約といふ事は必要ではありませんが、非常な金持で、一等の汽車にても乗れるものが、儉約をして三等の汽車に乗るといふ、是は如何にも質素のやう、儉約のやうであります。其の爲に乗車賃を工面して、僅に三等に乗り得た人の座席を侵略するといふ傾きがありはすまいか。矢張り一等に乗り得る資格の人は一等に乗り、二等に乗り得る人は二等に乗り得るやうにして、初めて社會の秩序も保たれて行くのはあるまいか。平等といふ思想からいへば、一等、二等などと分けるのは可怪いけれども、既に金錢を以て分けてある以上、財産の程度で一等に乗り得る人が二等ならば、まだよいが、それが三等に乗ると

いふ事は、三等の人の座席を奪ふといふ弊があるのであるから、質素儉約も其の人により、其の身分によるべきものであらうと思ひます。勿論三等にしか乗り得ない人が無理算段をして、二等に乗り、一等に乗るといふやうな事は、斷じて不可であるけれども、又其の反對に一等に乗り得る人が三等に乗るといふことを考へて見ると、必らずしも褒めた事とはいへないやうに思はれます、(これも其の人が自ら節して他に施すといふ公の心からならば結構ですが)。要は其の人が充分一等なら一等、二等なら二等に乗り得る資格があるならば夫てよい、資格がないのに乗るといふ事は悪いといふのであるから、先づ獨立といふ事を思うて我が行動が他に迷惑をかけるか、かけないかといふ事の方を初めに考ふべき事ではあるまいかと思ふのであります。抑も人間といふものは、獨立々々というても、眞の獨立といふ事は出来るものではないので、是を自分の生活の上に見ても、衣食住ともに

他人の力によつて出来て居るのでありますから、自分の喰ふ物、著る物、住ふ家、皆自分の力ばかりでは出来ないのであります。只自分が夫に對して、相當の報酬を拂つて他より得て居るものでありますから、自分の力で出来たやうに思ふのであります。何もかも自分でするといふ眞の獨立ではないのであります。さればこゝで獨立といふのは、他に厄介をかけずして、自分が生活をして行くといふことを、程度として見ねばなりません。他に厄介をかけず、眞に社會の共同生活たる、持ちつ持たれつして行く事が出来るものを、初めて獨立といひ得るので、自己の利益の爲に他に迷惑をかけ、若くは自己の行爲の爲に社會に害を流すといふやうなものは、眞の獨立ではないのである。如何に自分勝手であつても、其の事が人に害を及ぼす以上、我々は是を止めなければならぬ。他に厄介をかけるやうであつては、是は即ち依頼であり、依立てあつて、獨立ではないのであります。

さて此の獨立生活をしようとするにつきましたは、第一に考へなければならぬ事は、生計の獨立であります。

生計の獨立

即ち他の厄介にならずして自分が生活して行くといふ事、更に委く云へば、自分の額に汗を流したる金銭を以て自分の生活費を支へて行くといふ事でありませぬ。自分は何等の勞力を爲さず徒食して世にある人であるならば、假令巨萬の富ありといへども吾等は是を以て獨立生活をして居るとは云ひ得ないのであります。獨立生活といふのは、自分の額に汗して自分が生活して行くといふ事であるならば、獨立生活の第一には借金をせぬといふ事を要件とせなければなりません。

借金

借金といふものは必ずしも悪いものではない。若しそれが生産的に融通せられるのであるならば、夫は資本となるもので自己に勞力ありといへども資本なし、他に資本ありといへども勞力なしといふ場合に、他の資本を借り來りて、これに自己の勞力を參加して、而うして富の生産を計るといふ事は誠に結構な事でありませぬ。單に自分の衣食住の生活の爲に他に金を借りるといふ事が茲に所謂借金で、其の借金は他人の金銭を以て自己の生計を営むのでありますから、他に依つて立つので獨立ではありませぬ。かく云へば、イヤ如何に借金をするとも、夫は利子を自己が支拂ふのであるから決して厄介を掛るのではないといふ人があるかも知れぬが、夫は借金を返済して後揚言し得べき事で、借金中に云ふべき事ではない。夫

が果して返し得るか否か返した後でなければ判らぬのでありますから、借金をして居る場合には矢張り厄介になつて居るのであります。殊に自分の生活費に供するが爲に人に金銭を借りた者が立派に其借金を返すだけの餘裕が何時來るであらう。借りる時は返すつもりでも、生活の餘裕はなかなか生ずるものではないのでありますから、獨立生活の劈頭には借金をせぬといふ事を第一番に考へなければなりません。と斯ういふと、イヤ人間には不時の事がある、自分の病氣もあれば、又家族の者に病氣もある。其不時の場合に借金するといふ事は已むを得ぬ事ではないかといふ人もあります。が、是れは一應御尤な事ではありますが、併し已に人生に不時の事があるといふ事が豫想せられるのであるなら、何故豫め其の不時に備へて置く所の貯蓄をせぬのでありませう。

貯蓄

不時の事があるから借金をする権利があるといふのは決して主張にはならぬので、已に不時の事があるといふ事が分るなれば、何故豫め貯蓄をして置かなかつたかといふ反問が來るのであります。といふと、夫は餘裕があれば貯蓄も出来るけれども、日々の生活に追はれて餘裕がないから貯蓄などは到底思ひもよらぬといふ人がある。併し夫も妙な議論で、日々の餘裕がある人であるならば貯蓄を爲なくてもよい譯である。餘裕がないから貯蓄の必要があるのぢやないか。實際人間の生活といふものは其の仕方がいろ／＼あつて、十圓でも生活は出来るが百圓でも生活は出来ぬ。少しの収入でも貯蓄をして居る人もあれば、多くの収入でも借金をして居る人もあるのである。人生不時の事があるといふ事が明白の道理であるなれば

其の不時の事に備へるといふ事は我々の豫算の中に加はるべき當然の事ではありますまいか。されば如何にして貯蓄すべきか、それには生活費を成可く減少して行くといふ事、所謂簡易生活とか、質素生活といふことの必要なのは此處のこととあります。百圓の収入を得る者が九十圓で生活するとか、若しくは八十圓で生活するといふやうに多少餘裕を置くといふ事を考へなければならぬのであります。かくして其の残つた處、其の差額を以て不時の費用に備へるといふ風にして貯蓄が出来るのであります。確か金森通倫氏の『貯金のすゝめ』に書いてあつたことだと思ひますが、人間の身體は濡手拭のやうなもので、一見すると水はないやうであるが搾れば水が出る。我々の生活といふものは一寸見ると金がかゝつて居らぬ様であるが、凡て皆金銭で出来て居るのであるから、何處でも搾れば即ち金が出て来るのである。喰ふ所の飲食物も二汁五菜を一汁三菜にし、一汁三菜を

一汁一菜にし、著る著物も、御召を絲織に、絲織を鎧仙にすれば皆些少の儉約によつて、貯蓄の金はこぼれ出るのであります。然るに生活を自分の思ふ儘にして、さて残れば貯金を仕ようとするから餘裕の生ずる時がないのであります。貯金を先にして丁つて後の残りて生活するといふやうな事にしたならば、生活の方は如何やうにも加減せられるのであります。是は借金に對しても同一のことで、借金のある人が自己の金が餘つてから返さうとしては逆も返せるものではない。生計費は幾らにも縮少が出来ると、又膨脹も出来る、膨脹し、縮少し得る所のものを先にして、如何ともすべからざる借金を後にするといふのは大いなる過りである。先づ初めに借金の返済すべきものを引いて残りを以て生活する。即ち縮少し得べからざるものを先にして、縮少し得べきものを後にするといふ事が必要ではあるまいかと思ふのであります。是れが出来て初めて生計の獨立が出来るのであり

ます。

三養生

古人が三養生の説といふものを説いて、第一は心の養生、第二が身の養生、第三が身代の養生というて居る。身代が悪くなれば心が悪くなる。心が悪くなれば身體が悪くなる。身體が悪くなれば働けなくなるから、身代が悪くなる。身代が悪くなれば、心配をするから心が悪くなる。心が悪くなれば身體が悪くなる。身體が悪くなれば身代が悪くなると、いふやうに此三つは恰度一つの輪の如くにくるく廻つて居るものであるというて居ます。曩に云うた生計の獨立は所謂身代の獨立で、此身代の獨立といふものを計らうとするには矢張り身體の獨立といふ事を考へなければならぬ。身體の獨立といふのは外の事ではない、即ち我が身體をして他の厄介とな

らしめぬやうにするといふのでありますから、常に身體を健全にして、額に汗して生活し得るやうにせねばならぬので、彼の病氣になつて醫者の厄介になる場合には、已に獨立でないのは云ふまでもなく、其の間は自己の生産が杜絶して居るのであるから、其の生活は他の厄介にならなければならぬことゝなるのでありますから、眞に獨立生活を営まうとするには、衛生を重んじて身體を健康にするといふ事を忘れてはなりません。何うせ人間は死ぬる身體と極つて居つても、生きて居る間は世の中の爲め、人の爲に働かなければならぬのが人の義務である。「磯までは海人も簑著る時雨かな」海人は海中に飛込むのであるから、別に雨が降つたからというて簑を着て行くには及ばんのであるが、何れは海に飛込むべき者でも磯までは簑を着て行かなければならぬ如くに、何れは死の大海に没するものであつても、生きて居る内は衛生を重んじて行かなければならぬのである。何